

世界の宗教を觀る 加藤美倫著



始



515

32

比較  
宗教  
世界の宗教を觀る  
加藤美命著

著 加藤美倫

比較宗教  
世界の宗教を觀る

東京書局

515

32



515-32



比 較 宗 教  
世 界 の 宗 教 を 観 る



大正  
12.4.12  
内交

序

○ 宗教は哲學以前からあつた。どんな野蠻人でも、何かしら拜むべきものを持つてゐる。人間文明の最初の芽萌えが宗教である。そして最後の到達點であるかも知れぬ。

○ 哲學は實行を必要としない。宗教はあくまでも實行を要求する。實生活を離れて宗教はあり得ない。哲學の發達が、宗教の存在をすら脅かすに到つたが、結局、どうもならんて今は握手してゐる。いづれも渴ける人の心を癒すものでなければならぬ。

○ 支那の儒教、印度の波羅門、東洋の佛教、西洋の基督教、國土を異にし、人種を異にして、皆二千年からの歴史の上に發達して來てゐる。昔はとにかく、今日では皆お友達になり得る自由と便利とを持つてゐる。お寺の隣りに教會があり、坊さんも洋服を着て

比較世界の宗教を觀る (目次)

一 はしがき.....一

二 儒教と道教.....四

——孔子學と老子學——  
宗祖としての孔子——孔子を祀る——儒教は時代の反動——孔子の理想國——  
拜天の禮と祖先崇拜——禮の宗教——宗教としての孔子教——儒教に培は  
れた支那——儒教の批評——孔子をひやかした老子——思想家としての老孔  
——老子の失敗——宗教としての道教——支那に來た佛教——基督教の八  
にくい支那

三 印度教.....三五

——吠陀文學と波羅門教——  
祖國を追はれた佛教——アリアン人種の文明と宗教——複雑多な印度教——

洋行する。仲が好くなりさうなものである。

あれだ、これだと云つて居ないで、萬國同盟的な統一宗教が生まれさうものだ。宗  
派が違つてゐては、いろ／＼の不便もある。四海皆兄弟になれず、神の愛も佛も慈悲も  
萬遍なしに行き渡らぬ憾みがある。

どんなもんでせう、一つ世界の宗教家が大雅量を發揮して、彼と此と有無相通じ、たと  
へば世界語のやうな國際的な一宗教に纏めて下すつては——と、素人考へを申して見度  
くもなる。

ところが、どうもさうは間屋で卸さぬらしい。何故だらう。といふ所から、現存の有力  
な宗教の内容と生立を覗いて觀たのが此本である。

かとう・みろん

— 吠陀文學 — 萬有主宰の神の思想 — 印度教の三神 — 印度教發達の段階 — 印度教と階級制度 — 再生の人と動物的人 — 汎神的な厭世教 — 宗教好きの印度人

四 釋迦の佛教……………四〇

— 開祖物語と佛教の眼目 —

佛教を一口にいふと — 釋迦の佛教と發達佛教 — 難行苦行の釋迦 — 轉迷開悟の境 — 單純な真理 — 滅慾と因果の則 — 佛教の特色たる涅槃境 — 釋迦の僧侶團と民衆訓 — 釋迦の感化力 — 釋迦の傳導生活 — 釋迦の往生 — 佛教の說教の記録 — 三藏 — 大藏經 — 偶像崇拜化する佛教 — 佛教と無神教 — 基督教例からの佛教評 — 民衆教としての佛教 — 佛教は厭世教か

五 猶太人と基督教……………六九

— 耶蘇基督の宗教 —

イスラエル民族の文明 — 豫言者の群 — 豫言者の言葉 — 救世主に關する思想 — 一神教の猶太教 — 猶太民族の排外思想 — 舊約聖書の話 — 猶太

比較世界の宗教を觀る 次終

六 マホメツト教……………八九

— 不思議な回教の力 —

教の上に立てる耶蘇 — 基督教最初の團體 — マカロから宗教改革まで — 基督の中心思想 — 基督と自然 — 神の子耶蘇 — 耶蘇の洞見と確信  
史上の不思議 — マホメツトを生んだ土地と時代 — 荒野の宗教 — 試練時代のマホメツト — 神政國の主宰者としてのマホメツト — 銀を握れるマホメツト — コーラン經と其中心思想

大きい利益があると遠慮なく  
達磨市魁の重荷を肩にかける

比較 世界の宗教を觀る

加藤美倫著

はしがき

人間の住む所宗教あり

人間の住む所には必ず宗教が生れる。哲學の無い處にも宗教はある。古來幾千年、宗教は哲學と共に發達して來た。科學が一項非常な勢ひで、科學的知識以外のものは總て價値のない迷信だとまでされたものだが、人間を物質扱ひにする科學だけでは、どうも満足されない。最近になつて再び當の科學者自身すら宗教的方面に多大の興味を向けてゐる。宗教は人間生活の必然の產物で、人の心に光を投げる生命の安息として、人の世の續く限り永久に續くものでなければならぬ。



### 組織的宗教と原始宗教

世界の宗教を歴史的に観ると、組織のあるものと組織なきものとの二つになる。野蠻人が宇宙萬有の不可思議を自ら解釋しようとして、いろ／＼の粗雑矛盾した宗教を生み出すのがその最初で、時としてはそんなものの中にも、不思議な力を有つてゐるものがある。といふのも、純粹な心の閃きから來るので、それには偽りがない、傷ましき心の叫び聲である。だから、さういふ原始的な宗教の研究もなかく、興味あることだが、然し一朝首尾一貫した組織ある宗教がそこへ出て來ると、例へば旭日の前の星の如く、忽ちにしてその影を收めて了ふ。その信者も新しき教へに耳を傾け、舊來の思想を一擲し、祖先の偶像を放棄して新宗教に赴く。印度の土族を改宗せしめた印度教の如き、中央アフリカから東印度諸島を征服した回々教の如き、支那、朝鮮、日本に於ける佛教の成功の如き、皆この法則を事實に示してゐる。

けれども、一の組織的宗教が他の組織的宗教と接觸するときは、其趣がまた大いに違ふ。どちらが勝利者になるべきや容易に決定し得べき問題でない。そこには潜在するいろ／＼の勢力もあり、よほど同化力に富んだ宗教でも、その他に永く培はれたる他宗教を忽ち壓倒するわけには行かない。

### 世界の諸宗教

今日世界の文化國に行はるゝ宗教を挙げれば、先づ回々教、印度教、佛教、支那固有の宗教、それに基督教である。その他にもまたあるが、その信徒の數に於て之等に相對峙すべきものはまゝ無い。佛教と基督教を除くと、他の以上の宗教の信者數なども大差がなく、或る學者の説に従へば、その各自の信徒數は五億萬と云ひ、他の學者の説によれば一億萬だといふ。五億といふのは支那人全部を含めて言ふのであるが、支那人は佛教徒であると同時に道教も信じ同時にまた儒教徒でもあるといふ風で、はつきり分らない。まづ佛教が二億五千萬、印度教が二

億萬、同々教が一億五千萬、道教が五六千萬で、基督教は五億萬と數へられるのが妥當らしい。此本では、それ等の宗教の經典や開祖の人物、その教義の内容を瞥見する目的であるが、何にしても、例へば佛教の如き、釋迦の始めた頃の原始佛教と今日の佛教とは、その内容が甚しく變つて來てゐる、基督教でも、基督の説いた其儘の信仰といふものは、之を何の宗派に求むべきか、甲論乙駁甚しい複雑なものになつてゐる。そこで、此本の立場としては、成るべく開祖の説いた本來の主義に尋ねることに止め、後世になつてのいろいろの變化發達にまでは及び得ない。それらは亦別に篇を分けて書くより他あるまいと思ふ。それにしても世界の宗教の面影を此一巻に彷彿させ得れば著者の望みは足る。

## 二 儒教と道教

—孔子學と老子學—

### 宗祖としての孔子

その昔し羅馬の歴史家が、羅馬帝國を世界と觀、それ以外に世界が無いと思つてゐた。思ひきや東方に國あり、三千年の昔から燦爛たる文明があつた。そこでも亦自國が全世界と見られ、天下と云へば支那以外には無いものと思はれてゐた。今日全歐羅巴よりも人間の數が多く、その土地の廣さから云つても、氣候の區域から云つても、實に一大大陸と看做さるる支那が、革命や内亂はあつたにしても、とにかく一國として分裂しないで來てゐるといふことは、世界の歴史に獨特の記録とされる。

それが何に依るかといふと、直ぐ孔子が擔ぎあげられる。二千四百年の昔に孔子の成した經典が、支那國民の思想を支配してゐる力は偉大なもので、支那人の父と云つてもよい。孔子以前にも既に四千年支那國はあつた。孔子が第一に興味を持つたのはその歴史の研究で、過去の帝國が如何に國家繁榮の道をとつたかといふことが、孔子にとつて最も尊き研究であつた。彼は古人を信じ、古人を愛し

その全生涯を通じて、古人の聖徳を自分に體現しようとした。孔子は豫言者でも詩人でもない。寧ろ學者、歴史家、經典研究家、教育者といふ方が當る。自分でも「傳ふるものであつて造るものではない」と云つてゐる。彼は支那古代の歴史と宗教と習慣と一切を包括して、そこに統一する一大體系を築き上げた。基督は自ら神の子なりと云ひ、マホメットも神託を被るものと自信した。釋迦は宇宙に靈的解釋を與へた。凡ゆる宗教の創始者は、みな超人的であつた。自分でもさう信じ、信徒も亦さう信じた。ひとり孔子のみは、自分を單なる一個の凡才とし、古來の幾多の偉人には到底及ばぬものとし、たゞその古聖賢の教へてくれた處を研究し模倣するに過ぎないものと自分からきめてゐた。自ら神の默示に依りて我立てりと宣言しない人で、孔子の如く多くの信者を持つてゐる人は他にその比を見ない。

孔子を祀る

孔子がその徳を讃へ、その名を顯揚して措かなかつた聖賢は、いつか民衆から

儒教は時代の反動

忘れられて了ひ、彼のみ獨り幾百千萬の精神を支配するやうになつたなども面白い。民衆は神の禮拜をやめて彼の禮拜者となつた。赤貧の子も孔子の經典に通じて、他の競争者に勝らんか、大宰相たり得べしと知るが故に、皆孔子を恭敬した。支那のどこの小さな町へ行つても孔子の廟があり、學者貴顯帝王に至るまで、一種宗教的な禮拜奉事を捧げる。我等が崇敬する孔子よ、願はくば我等が謹んで汝に捧ぐる此尊敬を受けよと云ひ、香膠、乳香、白檀を薫じ、果物、酒、花をその祭壇に捧げる。逝ける兩親を祀るが如く、支那全國民は孔子を祭る。この全支那を支配する孔子の教を儒教と云ふが、儒教を語ることは孔子自身を語ると同じ意味になる。孔子は日本には随分おなじみ過ぎる程だから、大抵御承知でもあらうが、物の順序として簡單に其生涯と性格と、それから流れ出た儒教の精神を先づ観る。

孔子は約二千五百年前の人だ。彼より十年前に、印度では釋迦が生れた。希臘では社會哲學の父と呼ばれるピタゴラスが生れた。永き支那の歴史にも、此時代ほど文明の輝きを見た時は無い。大哲老子も當時の人であり、老孔二聖を中心としてまた幾多の偉大なる門人を生んだ。孔子は支那封建の一國魯に生れた。今の青州に在る。相當の名家ではあつたが、早く父が死んでヒドく貧乏だつた。十九の時に結婚したが、その家庭生活は幸福なものでなかつたらしい。いろ／＼な官職に就て、職務を忠實にやつてゐたが、斷然その職を捨て、民間の指導者の生涯に入つた。弟子が次第に加はつて約千人を算するやうになつた。

その時代は例の戰國時代で、支那の天下は蜂の巢をつつついたやうな亂脈であつた。宗教はどうかといふと、支那古代のそれは、本來漠然たる一神教であつたものだが、だん／＼劣等な多神教になつて來、山川草木其他自然物の禮拜とかいふやうなことも盛に行はれ、殊に占ひの盛な國で、途方もない迷信が盛に行はれ

た。それに士農工商の階級はあつたが、特に僧侶といふものゝ無かつた國で、まるで詐偽のやうなことを云つて自分の腹を肥やす卜占的迷信が人の心を支配してゐた。孔子が一番胸糞を悪くしたのは、その不正偽瞞であつた。だから、見ることの出来ない世界とか、神祕の世界とかいふことについては、寧ろ反感的とも云ふべきほど何事も云つてゐない。西洋の學者は、孔子は神様を知らなかつた、地上の事を語る一教師で、天上の世界を示す宗教家ではないといふ所以もそこにある。さういふ意味から云へば、成るほど彼は非宗教的であつたが。例の、その昔から傳はつてゐる禮禮と感謝の國家的儀式に非常に重きを置いてゐるやうな點で、どうしても一種の宗教の域を出てゐない。

### 孔子の理想國

孔子の理想は、堅固な平和を此世界に建設する、家を治め國を整ひ、この地上に合同平和の一大帝國を建設するといふ精神であつた。孔子はそれを目標として

さうした過去の研究の結果、孔子が得た結論は何か。第一に拜天の禮を語らねばならぬ。拜天の禮といふのは、帝王が人民の代表者として行ふ禮拜式で、一般人民は自分の家の先祖を禮拜してゐればそれでよいといふので、所謂天を拜すといふことを民衆からは引離して丁ひ、民衆の宗教は祖先崇拜といふことだけにした。孝道が凡ゆる道徳を包括する最も大なる徳とされる所以もその邊から出て來てゐるので、支那に佛教や道教が盛になつて來ても、此孝道の一事に至つては、儒教の規矩を遵奉せざるを得なかつた。坊さんなどでも矢張り祖先を祭り、その親戚の死んだ時などは、支那古來の習慣に従つて喪に服さねばならん、その義務を過らむか百叩きの憂目に遭はされた上に還俗せねばならなかつた。回々教なども支那へ來ると、この祖先を祭る儀式をやらせられる。獨り基督教のみが、ともするとそれに違反するのでやかましく非難される。支那へ行つて祖先禮拜の惡口などでも演説しやうものなら、忽ち滿場總立ちの大騒ぎとなる。孔子教の第一で

それに達する道を説くのに、人間自然の法則と個人が踏んで來た道義に訴へ、天とか神とかいふ超自然界から來る默示に依るやうな事は少しもなかつた。所謂怪力亂神を語らずで、彼の力が支那人の迷信を抑制し切る迄には行なかつたが、少くも迷信を啓發するに努めたことは見ねばならぬ。さういふ點で彼の教は極めて現世的で、佛教や基督教のやうな味はひが少しもない。

孔子の考への大眼目は頗る簡單なもので、世を舉げて過去の黄金時代に復歸せしむるといふだけのことだ。彼の頭にある過去は其儘彼の理想國であつた。その國の王様達は殆ど完全な徳を備へた大人格であつた。人民はその徳に傾倒し、教へに耳を傾け、天然に備はつた禮法と、人々の身分に應じる道徳を實踐躬行した。その國の法律習俗制度は、自然に逆はぬ聖なる道であつた。だから彼はその過去の研究に全生涯を舉げ、門人等に對しても歴史を研究しろとのみ説いたものだ。

拜天の禮と祖先崇拜

ある拜天の禮が此處まで滲み込んでゐると思ふと恐ろしい。

#### 禮の宗教

次に、人の性は善だ、天は其人各々の才能に應じ、社會的地位に應じて遵奉すべき法則を與へてゐる。それが自ら生れ出て來た法則で、形になつて現はれたのが禮法だ。殊に人と人との社會的關係について、例へば君臣、夫婦、親子、兄弟などの關係について、昔から自然に出來てゐる規則がある。妻は夫に隨ひ、子は親に隨ひ、臣は君に隨ふ。此三つは社會の三大綱領だ。婚姻、埋葬、祭献、拜天、國祭、婦人の權限、青年の教育等に關する儀式、つまり人間生活の一舉一動は、皆古來から定まつてゐる規則によらねばならぬ。その規則が禮だ。禮といふ言葉は、支那人にとつて終局の根本眞理を示すものである。なせそんな些細な事柄まで規則づめにするかと問へば、社會の最大幸福を確保し、民衆の道徳を維持するには、それ以外に求め得ないと孔子は信じてゐた。

#### 宗教としての孔子教

孔子の教へたところは、古い眞理で新しいものではなかつた。けれども、その古い眞理に新しい形體を與へ、自分の思想で之を裝飾し、時にはまた古代の律令や歴史をも都合よく變へた點もある。各個人が完全な自治に達するといふことを説く點では、老子とも一致する。だが、老子の教へた自治は、孤獨靜寂な原始的な自然生活に入り、人にも迷惑をかけねば、何等まとはすこともないといふ無爲の境涯を説くのだが、孔子は國家の幸福秩序に貢献するに一層應はしいものたらしめる修養を説いたのだ。人間はその個性に従て行くところに、道徳的生活がある。己れの欲せざるところ人に施すなかれといふ金言が其意味を最もよく表はしてゐる。孔子はその意味を亦「恕」といふ一字で云つてゐる。恕は孔子の體系中の特殊の言葉で、老子教の骨髄たる「道」などよりも分りが早い。恕とは、我が心は汝の如しとか、我が心は汝の心に同情すといふやうな意味で、人と人との社

會的關係は、それに依て圓滑に行くといふ意味だ。

儒教は民衆教としてかなり成功してゐる。が、大體が前にも云ふ通り現世教で祈禱といふやうな事については、殆ど説いてない。罪惡とか罪過といふやうなことも其念頭に置かず、僧侶も牧師もない。儒教に依れば、帝國のみがひとり公認された國民の僧侶だ。その説法は、經典の教示にあるのみだ。だから、人が之を宗教と云はない、にも拘らず、孔子は自ら宗教と云つた。その道は極めて實際で、假想を喜ばぬ實際的の支那人には持つて來いの教へである。

#### 儒教に培はれた支那

儒教は人を王者たらしむる道を教へるもので、人間としての道を語るものではない。儒教が如何に盛になつても、たとへ其國は榮えらるるとも、之を我等の目から見れば、頑迷欺瞞、不道德、殘忍等に滿ち充ちた世界で、決して美はしき天國と思ひみることが出來ぬ。罪を憎む基督教の理想などから見れば、儒教國の道德など

は到底お話にならぬ。一體宗教的感化力のない教育といふものは、云ひ換へれば神とか佛とかいふやうな思想をちつとも含んでゐない教育といふものは、本當に民衆を率ゐて行く微妙な力に缺けてゐる。儒教に培はれた支那の社會が、腐穢無能を示してゐるのは此邊の關係からで、一方儒教が宗教として不充分だと云はれる理由も其處にある。佛敎や道敎が異端だ外道だと云はれ乍らも何時の間にか支那人の多數に入り、爲政者が亦之を公然認めて、嘗て孔子が語ることを禁じた靈怪を語る宗教に、民衆の教育を委ねようとした理由も其處にある。

#### 儒教の批評

孔子が上帝禮拜を帝國のみの特權とし一般人民と神との交通を遮斷し、未來世に關してはちつとも知らんと言つてゐる所に、宗教としての大缺陷がある。その缺陷を補はうとして、人に告ぐるに神秘的な事を以てし、天上に在て人間以上に位し、國家以上に位する事物を喋々談論したのが末派の道教だ。

儒教が過去のみを尊んで、智慧はひとり過去にありとする思想も陳い、「過去は奴隸の爲に設けらる」といふエマアスの言葉を思ひ起すが、過去のみに凡ゆる價值を置くと、そこには希望と進歩の精神が鈍る。儒教國が基督教國に向つて第一番に誇る例の孝道なども、過去に心酔する一方の考へから見れば成程だが之を泰西の思想から見れば、老人を其の子が養ふといふ事のみが道徳であつて、父は其子の爲に必要なものを貯へねばならぬといふ一方の眞理を無視してゐる。儒教に依れば、親はその死後神として祭られ、また父としては子の不正を隠蔽することを道とし、子としては父の不正を隠蔽せむと希ふ。義はその中にありなどと云つてゐるが、不正を隠蔽するところに義があるとするのはどうか。「我の來れるは其子をして其父になかしめむが爲なり」と喝破した基督は、父に不正あらばそれに反けと教へてゐる。罪といふことに對する根本の標準が違つて來る。孔子は亦、男子は皆老齡子の行爲を模範とせよと云ふ。老齡子とは何かといふと、そ

の年七十になつて再び子供に還り、子供の着物を纏ひ、子供のやうに家の中を遊び廻る儀式をやつた人だ。長老必ずしも我等の規範となるべきや、所謂祖先崇拜から來た孝道哲學も、此處まで來てはいかゞなものだ。儒教は、政治的教育的組織としては驚くべき成功を奏してゐるが、と同時に支那をして全世界中最も保守的な國民となし果てた觀がある。

#### 孔子をひやかした老子

孔子が老子を訪ねたとき、孔子の持つてゐる本を、その本は何ですと老子が尋ねた。之は易經です、古の聖賢も此本を讀みましたと孔子が答へる。そこで老子いふ。

「古の聖賢は此本を讀む資格を持つてゐません、それをあなたが讀むといふのは一體何の爲か、その本はどういふ眞理を教へますか。」  
「人道と正義とを教へてゐる本です。」



と孔子が答へる。一體老子は、孔子のやつてる事などは到底無益の業で、虚偽の仲間位に思つたものらしい。そこでまた老子がいふ。

『今日正義だ人道だと云つても、あれは皆虚名です、残忍酷薄を隠蔽する假面に過ぎません、人々の心を苦惱させるだけのものです、社會の秩序が紊亂錯雜してゐること今日より甚しきはありますまい。御覽なさい、鳩はその身を白くするために別段入浴もしません、鳥はその身を黒くするために、毎朝墨を塗ることもしません、あなたのすることは恰度逃亡した羊を鼓を鳴らして探し廻るやうなものです、人を困らせることだけのことです。』

老子のいふ意味は、やれ忠だの孝だのといふが、忠だ孝だと口に出して云ふときは、忠孝の實質が既に消え去つてゐて、その影を止めるに過ぎない。鳩がその身を白くする爲に沐浴したり、鳥が墨を塗つたりするならば、その時はもう彼等本來の色を失つてゐるときだ。本當に忠孝の徳を持つてゐる人ならば、何もそれ

を公言するわけがない。總ての人が善人であるならば、悪人などいふ名前も此世に生れて來なかつたであらう、といふ風な意味であるが、孔子には老子の態度と云ふものが解し得なかつた。彼自身は、若し自分を用ゐるものがあるならば、此世を改造して理想國を實現し得ると確信してゐた。その腹の底が自ら彼の言語動作にも現はれたものだらう、さつぱりとあきらめてゐる老子から見れば、青年の夢想としてバカげて見えたに違ひない。老子は孔子を愚弄したらしい。

『あなたが民衆に課さうとする法律禁令や儀式典禮、そしてまた民衆に古人の善行を模範とさして、それで彼等を改善し得ると思つてゐるのは皆間違ひだ。法が多くなれば、その裏をくぐらうとする奸智も多くなる。それに過去の死んだ人のやつた事に、今の生きてる人がどうして一生を託し得るものぞ、あなたの方法は或は一時成功するかもしれませんが、けれども其成功は、たゞ偽腐敗を隠蔽するだけの話で、そのうち更に一段の勢力を加へて悪事悪徳が爆發して來るでせう。』

と、ずつと高いところから老子が冷やかに云ふ言葉に、孔子が反省させられたのも無理ではない。けれども、老子は結局何等世道人心を導くやうな方法を探らず此世を棄てるといふ厭世に終つたが、孔子はあく迄も先人の勞苦に依て築きあげられた文明を更によき文明へと進ませる爲に努力した。

#### 思想家としての老孔

思想家として此の二聖を見るならば、孔子は到底老子の獨創的な哲學的なところに及ぶべくもない。老子の云ふ事は、孔子から見るとズンと抜けてゐる。孔子は、己れの欲せざるところ之を人に施す勿れと云ふが、老子のは更に深く、「惡に報ゆるに善を以てせよ」と喝破してゐる。孔子にはそれが受け容れられない。孔子の門人が此言を聞いて、驚嘆昏迷し、どういふものでせうと孔子に訊ねた。孔子も迷うた。惡に報ゆるに善を以てせんか、善に報ゆるには何を以てせんや、善に報ゆるに善を以てし、善に報ゆるに善を以てせよと要領を得ないことを云つて

ゐる。

#### 老子の失敗

老子は支那が生んだ最大の獨創的思想家だ。あの偉人にして其感化が支那全土に及び得なんだのは何故かといふに、西洋でストイツク學派が、たゞエビクタタスやマアカスアウレリアスのやうな偉い人達に對してのみ成功し、一般民衆には何等の感化も及ぼし得なかつたと同じやうなわけだ。老子の絶叫した所は、世の虚榮を放棄して德に従へ、德は其物自ら褒美だといふのだが、一般人から見ると、自分等が目に見るものを放棄して、何やら不確實なるものを掴めと云はれるやうなものだ。そこへ行くと、基督教などは神といふものを明白に云ひ、イエスの靈に依て父なる神と人類との結合を説き、イエスに對する熱愛が人々の心から一切の劣情を驅逐させるといふ、はつきりした功德がある。さういふ點で貴賤貧富を通じて廣く感化を施し得た。

### 宗教としての道教

この老子の哲學を土臺として生れ出たのが老子教(道教)だが、之はまた老子の根本思想とはすつと變つたもので、殆ど迷信と云つてよい。全く民間の低級な宗教で、禁厭、呪咀、魔術、鬼神親和術などいふやな變テコなものと同落し去り愚蒙極まる偶像崇拜と化し去つた。甚しきは惡鬼禮拜といふやうなことでまでやつたものだ。そのうち、そんな迷信を妄信する帝王が出たりして、一時道教が全盛を極め、儒教がヒドク壓迫され、鴻儒碩學は土中に生理めにされ、その經典は燒棄てられたやうなこともあるが、さういふことが却てまた儒教の聲價を落した。

とにかく、人間は何かしら拜ますには居られない。全然さうした信仰的な對象を説かない儒教だけでは、とことなく民衆が寂しさを感ずる、前にも云ふやうに儒教が天を説いても、その天を拜し得るのは唯帝王のみとしたところに、儒教の宗教としての根本的缺陷がある。その缺陷を充たす爲に、迷信でもなんでも道教

### 教道と教備

が一般に喜ばれたといふ意味がある。佛教が驚くべき勢ひで支那に入つて來たのも、その缺陷に依るので、佛教が入つて來て以來は、嘗ては民間の愚なる迷信に過ぎなかつた道教も、佛教の風に習つて自ら一の組織的な宗教となり、神殿・禮拜式、偶像等のいろいろの形式も定めるやうになつた。それからの支那の民衆は此道佛二宗の何れかを信仰するやうになり、教育のある人は儒教者で、他宗の信徒となることを潔しとしなかつたが、それでも同時に佛教を信じたりし、甚しきはひとりで同時に三宗を信仰するといふ連中さへあつた。

### 支那に來た佛教

老子は道教の祖と擔がれて甚だ迷惑に違ひないが、とにかく、民衆的にはかなり社會の底まで泌み込んでゐた。さういふ準備を道教がやつてゐた土地に根を下した佛教が、忽ち繁榮になつたも不思議がない。外來の思想や教化を毛嫌ひする國民性があるにも拘らず、従つて佛教撲滅論が沸騰したにも拘らず、紀元六十五

年には、支那の公認宗教として、佛教の地盤は磐石なものとなつてゐた。原始的佛教とはすつと違つてゐる西藏佛教などが特に支那生活に歓迎され、お寺は全國到處に建てられ、その感化は遠く北方の野蠻人にまで及んだ。かういふことは一面から云ふと、儒教の缺點を歴史的に語るもので、儒教を生み、その徳をたへる支那國民も、外來の宗教に依て自國の宗教の缺點を補はねばならなかつたといふ事實を物語る。

### 基督教の入りにくい支那

基督教は人を罪の子とし、たゞ天なる神に絶つてのみ救はれると説く。儒教は神を遠ざけ、人の性を善なりと高調し、その教ふるところに従つて行かば、人性の完美を全ふし得べしと説くから、罪惡の觀念が薄い、基督教の宣傳者が一番手古摺るのは儒教國だ。彼等は言ふ。「支那學者輩には罪惡の感覺が殆ど絶無で、基督の十字架は彼等の頭に入り得ない。現に支那の基督教と云へば、殆ど全く下級

民ばかりだが、殊に世襲貴族などを基督教徒たらしめることは、駱駝の針の穴を通ることよりも困難だ。儒教は凡ゆる宗教に對して無頓着だと云ひながらも、却て固陋頑迷な道教、基督教を敵視し、之を公然誹謗する道教に比較して、基督教から云へば苦手らしい。

### 三 印 度 教

— 吠陀文學と波羅門教 —

#### 祖國を追はれた佛教

面白いのは印度である。宗教とか哲學とかいふ方面から觀て、印度ぐらゐ興味が多い國はない。世界中で最も美しい國土に住み、豊かな天産に恵まれて、その國に住む人達の頭が自然瞑想的な方面へ進んだ、印度と云へば直ぐ釋迦の生れた國として佛教を聯想するが、佛教も一時は故國に榮えたが、一つは南方ビルマ、シヤムに追はれて南方佛教となり、一つは西藏、支那、日本に榮えて北方佛教と

なり、本家本元の印度には、昔からある印度教が佛教を壓して一向振はん。恰度基督教が基督の祖國に榮えてないのと同じやうだ。

#### アリアン人種の文明と宗教

印度には今二億の印度教徒と五十萬の回教徒とある。人口から云つても、土地の廣さから云つても、支那と同じやうに、宛然たる大陸である。あすこの人種でも、最上階級に位してゐる人種は、その祖先を英吉利人等と同じうするアリアン人種だ。印度歐羅巴人といふのがそれだが、此人種は四五千年の昔には中央亞細亞の高原に住んでゐたものだが、だん／＼人口が殖えて来て、一方は南東に山を越え印度に移住した。その前にも無論土人等が住んではゐたが、この新入民がそれ等の土民の征服者として忽ち繁殖蔓延した。そのうち久しい間印度の日光に曬され、また土民との雜婚などから、皮膚も黒色を帯ぶるやうになつた。梵語の起原を開いたのも此新入者たるアリアン人種で、吠陀教や波羅門教や印度教として

知られてゐる宗教を生み出したのも此人種だ。ペルシヤ帝國を建設したのも、それから分れて行つた一派で、ずつと後で回教徒たるアラビヤ人が此國を征服するまで、世界の一強國として存在してゐた。

西の方へ向つたアリアン人の一派は歐羅巴に侵入した。希臘を建設したのも羅馬國を打ち建てたのも彼等で、廣く地球上に蔓延して文明の前驅をなした。

#### 複雑多様な印度教

此印度に榮えたアリアン人の生んだ宗教は實に種々雑多なもので、回教、儒教、基督教といふやうに、單一の名前をくつつけることすら出来ない。長い間全く自然に、それも誰がつくつたといふことでもなく、凡そ幾千の聖人、豫言者、詩人、立法者、僧侶、哲學者、改革者、遁世者等に依ていろ／＼に説き出されて來たもので、一大中心をなす聖書のやうなものも無論ない、否澤山有り過ぎて、これが一番のものだと自稱するものもあり、どの本も皆それ／＼の權威があるものとき

れてゐる。一神的なものもあれば、有神教的、多神的、汎神的なものもある。だから  
いろんな教派が其間から起り、その説くところも十人十色の風だが、それでも尙  
皆印度教といふものゝ中に含まれる或る色彩がある。そこでその複雑々多の宗教  
を名づけて印度教と云つてゐるのだが、他の宗教を觀るやうな觀方では一寸分り  
かねる。といふのは、第一誰が始めたといふ中心の人物もなし、澤山の聖典の中  
から、その根本を詮索することも容易でない。だか、三千年間進歩發達して來た  
その教へを、面倒だからというて御免を被るわけにも行かない。それに、自然の  
儘にして置くと、宗教がどんな風に發達して行くかといふことを見る上からも興  
味があり、中には亦途方もない迷信なども入つて來て、かなり興味もある。

#### 吠陀文學

まづ、印度教の根本聖典とも云はれるものであり、古き印度の記録としても唯  
一の材料とされるものに吠陀文學がある。吠陀といふのは、まあ聖典といふほど

の意味で、中でも最も代表的なものが四つあり、その一番古い一番重要なものと  
される梨俱吠陀といふのが、今から三千四百年前に出來たものらしい。一面印度  
アリアンの歴史を書いたものであり、天地自然の讚美文學でもある。宗教的な讚  
美歌と俗謡が其内容で、祭りの時やなにかに誦唱されたものだ。  
それから、書いて置いてもどうせ飛ばして讀まれるだらうと思はれるやうな、  
おなじみの少ない名前をこゝに挙げねばならんのだが、どうせ飛ばされるなら書  
かんことにして内容だけ云つて置く。大體は前のものゝ註釋とか或はそれをお祭  
りの時誦唱するやうに順序をつけ換へたとかいふやうなもので、それに、も一つ  
低級な呪文のやうなものもある。かういつた本は、誰が書いたといふことでもなく  
昔からだんく云ひ傳へられて來たもので、信者から云ふと天惠の書であり絶對  
的權威の書である。もつと後で出來たものに波羅門書といふ一種の神學書のやう  
なものもある。祭式の方法や意義を説いたものだ。その外にも聖傳書といふやう

なものであるが、かうしたものを引つくるめて吠陀文學書といふ。吠陀といふ言葉は神の知識といふことで、神様から直接に聞いたことだと云はれてゐる。要するに目に見えぬ天地の神を讚美し之を祈る詩のやうなものである。

#### 萬有主宰の神の思想

近世の印度教は實に無數の教派に分れて、偶像禮拜も他に比べると無いはど盛だ。どこを歩いてても偶像に出つくわす。人間よりもその數が多いといふ奇觀を呈してゐるが、最初は、一切のものは唯一つの神より出たといふはつきりした一神教であつた。全宇宙には唯一の存在者あるのみ、第二位に位する何ものもなしといふのが其根本思想であつた。彼等はその不可思議な萬有主宰の神靈に對してブラーと名づけた。ブラマといふのは、全空間に亘り萬有に化生する。つまり萬有に先ちて此世に存在し、萬有は彼に依て造られ、そして又萬有は彼と其性質が同じものだといふ意味で、基督教の神に相當する。

#### 印度教の三神

さういふ永久の非人格的神靈から、どうして此目に見える宇宙が生れて來たかといふことを説くために、三つの神様が説かれる。それはブラマから流れ出て來たもので、宇宙創造の神と保存の神と破壊の神と此三つだが、それが三つであつて實は一つだといふ、印度の三位一體説といふのがこゝに生れる。その三つの神様の話を少しさして貰ふ。

宇宙創造の神が梵天で、ブラフマンといふ。之は諸神の父で、世界は總て之から生じ此中に住し此中に滅し又此中に歸るとされ、萬有の生住滅の原因とされる。ずつと後の印度哲學でも之が宇宙の實在本體として取扱はれ、現にダゴールなどが云ふ梵といふのは、之を哲學的に云つたものだ。この神様は公平で、祈つても別に特別の恩寵を與へるといふことをしないといふので、禮拜歸依の對象とはならぬのだが、偶像好きの印度では、今は三面四手に珠數や水鬘を持つた像に造り

上げられてゐる。此神様が一番古くもあり最高のものなのだが、その次にまた二つ神様が出来て来たので、一寸勢力を奪はれた形がある。が、三神一體といふ説明から、今でも矢張印度教の一番の神様と奉られてゐる。

次は破壊の神様で同時に親切な神様にシヴといふ神様がある。はじめ亂暴な仲間から信仰され、それがだん／＼勢力を得て来て、ブラフマンと肩を並べるやうになり、一般の信仰の對象となつた。此神の最も特色とするのは、生殖器崇拜の對象になることで、自在天なども云はれ、三つ目四つ手の恐ろしい形相で、三叉の矛、それに包みと繩と棒とを持つてゐる像で表はされてゐる。すつと前の吠陀時代では、嵐の神といふ名で云はれてたものだが、紀元前からシヴ神として拜まれるやうになつた。

三步にして天を歩き盡すといふ素晴らしい速い神様で、太陽の光線に例へられるヴァイシヌといふ神様が第三のもので、人が死ねばその懐に抱かれて極樂へ行けるといふ風な意味でヒドク尊ばれ、紀元前二世紀頃には既に一般に信仰されてゐた。四つの手には輪と笛と棒と蓮華とを持ち龍蛇の上に仰臥し、臍から蓮華が咲出で、その上に梵天が坐つてゐる像で今に拜まれてゐる。

今日の印度教は非常に宗派が多くて複雑だが、大體今のシヴ神を主神とするシヴ派と、ヴァイシヌを中心とするヴァイシヌ派との二つに分け得る。永い間にだんだん幾つにも派が分れて發達して来たのだが、十九世紀に入り新しい宗教運動が起り、各派に覺醒の機運が漲つてゐる。

#### 印度教發達の段階

最初の吠陀文學時代の印度の宗教を第一階段とし、之を吠陀教と名づける、それがだん／＼哲學的に論究されるやうになり、後年また佛教と相並んで、印度全土に普及してゐた時代を第二段階とし、之を波羅門教と名づける。それから後、波羅門僧が吠陀を神學上の見地からスツカリ系統立てるやうにした時代を第三段



階とし、近世の多数教派時代となつて之を總括して印度教といふ。

#### 印度教と階級制度

吠陀教から波羅門教に轉化する、その發達につれて最も目に立つて來たのが階級制度の出現だ、階級制度は元來印度宗教の骨子とも云ふべきもので、吠陀の歌を讀み上げるにしても、王族と軍人、文人と僧侶といふ風に階級を區別し、之等は普通の民衆以上に位するものとした。殊に昔からの土着の人種などに對しては絶稱に離婚を法律で禁じ、全然別の階級に置いた。けれども矢張違つた階級間の離婚は絶對に禁するわけに行かず、いろいろの雜種がそこに生れ、今日では殆ど數百を以て數へる階級がある。かういふ風に、その階級組織が極めて複雑になつたにも拘らず、彼等の所謂再生の人々と其他の人々とは根本的の區別がある。波羅門族がそれで、僧侶の意味だ。彼等のみが教育ある階級に屬してゐたのだ。彼等は二千三百年の間、印度王族の顧問たり、印度人民の教師となつて其位置を

保つて來てゐる。全世界に於て彼等の如く永い間社會の最上地位に傲然として安居する階級は無いとされる。

階級制度は非人道的のやうだが、印度のそれは、起原から見ると人種的必要から出て來たもので、殆ど必然的な勢ひであつた。印度國を征服したアリアン人種は、征服者とは云ふものゝ、その數から云へば臣民たる他人種に遠く及ばない。自分等の文明と宗教とを永久に維持しようと思ふには、その血統の純粹を保たねばならんと考へたのも自然だ。猶太人もモーゼの立法に依て、異邦人の血を以て汚されまいとした。現代でも南亞の和蘭移住民が自ら神の民と稱し、他人種の間

#### 再生の人と動物的人

今から二千二百年前に、印度人の生活を描寫した希臘の人がある、その記事に依ると「印度の婦人は純潔で男子は勇敢、彼等は眠るにも戸に錠を下さず、彼等

の中には嘘をつく者が一人もない。殊に驚くのは、その中に冥想沈思を専業とする人々の一階級があることだ」と云ひ、その人は此階級を賢人と名づけてゐる。これが波羅門族で、波羅門族は僧侶であり同時に學問をすることがその業務であつた。彼等は自分等を神の子と稱し、見えざる神を見得る才能は波羅門族にのみ與へられたる特權だと考へてゐた。だから神の子は人の娘と婚姻すべからず、彼等の法律制度は、その目的を遂げむが爲に制定されたもので、その根本は「再び生れたる人」と單に「動物的人」との間に漸然たる區別を置くにあつた。

再生の人は吠陀の研究と儀式祭禮の實行、肉體的愛欲の絶滅といふ修行に依り精神の自由を得、見えざる梵と自分との關係を親和させることを學ばねばならぬ、之はひとり自分の幸福のためばかりでなく、社會はさういふ賢者の支配に依り始めて幸福になり得ると考へてゐた。階級制度の根本的考へが其處にあつた。けれども、かういふ靈的人間と動物的人間とを區別するといふ考へは、どうせ永

く弊害なしには續かない。彼等の人種的嬌慢から他族を輕蔑しその權制を蹂躪するやうになり、その大反動として生れたのが佛教である。佛教が出て波羅門教もひどい打撃を被つたが、そのうちまた幾世紀かの動搖を経て再び印度の民心を收攬し得たが、前のやうな階級思想はだん／＼勢ひを失つて來た。

#### 凡神的な厭世教

印度教はその根本に於て汎神教である。少くも汎神的趣味で一貫してゐる。それが吠陀であつても、哲學でも、法律書でも、琴歌でも、叙事詩でも、その叙述の方式はいろ／＼に變つても、その中には皆一様に汎神的思想が流れてゐる。つまり、此世の凡ての物はみな梵で、梵以外には何物もない、藁の如き最下等の物より神の如き最高等のものに至るまで皆梵だ、人間の靈魂もブラマから流れ出て來るものだ、そこで吾々がそのブラマと密接な關係を得ようとするならば、先づ總ての周圍の事物から絶縁せねばならぬ。

「人は全生涯を通じて決して執着があつてはいけない、大洋上の遊泳者が、着物の邪魔なしに思ふ儘に遊泳する如く裸でなければならぬ。人の靈魂は地から引抜かれたる葦の如く、蜂蜜より引離されたる蠟の如し、悲しき調べにて梵徒の分立を哀哭し、灯せる蠟燭の如く熱き涙を流し、その個體を消滅させることに依て世の桎梏より脱し、唯一の愛者ブラマに復歸するの道として、その時の至るを熱望する。」

といふ、茲に印度人が懐いてゐる思想の全部がある。少くもかういふ思想に重きを置いた宗教でなければ印度人には受け容れられない。

#### 宗教好きの印度人

印度思想に従へば、人生は一迷妄に過ぎない。人生の目的は發憤努力して完全の域に進まうとするのではない、意志と人格の絶滅、早く云へば精神的自殺に依り始めて神と一致するといふのである。印度人の神の觀念は深遠なものだが、基督

教などから見れば、第一印度思想は神の人格とか、神と人の區別とかいふやうなことを全然無視してゐる。従て道徳も不道徳も、共に絶對者の中に含有されるもので、その兩者の間に區別がない、人間の人格も無視する。一體、實際的活動に現はれて來ない冥想沈思は無爲靜寂とか不自然なる出世間的とかいふやうなことに終る傾向を持つてゐる。

汎神教から云へば何もかも神様になつて了ふ。少くも神の現はれになつて了ふ。現に印度教ではいろ／＼の神様が案出され、終ひには三億三千の神を生ずに至つた。波羅門の徒は、その汎神説の便宜を藉りて、どんな神をも受け容れ、どんな偶像をも是認して之を禮拜するのを當然とした。多少不體裁な神様でも、何れは寂滅の大海に導く無數の支流の中の一つに過ぎない。だから印度教徒でなくも、印度教の神を拜して一向差支へがない。釋迦などもヴァイシヌ神の第九の化身として承認されたものだ。基督を第十の化身と云つても差支へあるまい。印度教の弱

點の極まる處はかういふ點に在るが、凡そ印度人ほど宗教的な人種は無く、印度人ほど理想に忠實なものはなく、また肉的生活を輕視するものもない。だから吾々は印度の歴史を見て驚くべき一時代のあつたことを知る。釋迦入滅後、社會の最高階級の人達にして佛教宣傳の爲に遠く諸外國に巡錫した時代の如きそれだ。

#### 四 釋迦の佛教

——開祖物語と佛教の眼目——

##### 佛教を一口にいふと

佛教は印度教から生れたと云つてよい。恰度猶太教と基督教、羅馬教と新教と云つた工合で、少くとも幹と枝との關係にある。枝が幹に比べて澤山の信者を持つてるといふわけでもないが、幹が一地方に根を張つてぐづ／＼してゐる間に、枝は世界的に廣がつた。基督教と佛教とは共に偏狭な地方的宗教から脱け出た。佛教と云へば、先づその宗派の多いことや何千巻とかいふ經典などに嚇かされ

て了ふが、嚇かされて了つては話が進められない。一口に云ふと、佛教と佛陀を中心とする教へだ。佛陀の教ふるところに従ひ、その行ふ所に則つて、吾れ人共に佛陀になれと教ゆる宗教だ。佛陀は佛とも云ひ、迷ひの雲晴れて宇宙の眞理を體得した人といふのがその佛陀で、覺めたる人の意味だ。自分が覺めるばかりでなく、人をもそこへ導かねばならぬ、つまりその人の一舉一動は直ちに宇宙の眞理と合致するといふ妙境に達することで、佛教の目的は所謂その覺めたる人の地位まで行くことだ。覺めろと云つても、どう覺めるんだと云ひたくなるが、それがそも／＼迷つてゐるのだと佛家は云ふ。自分勝手の議論ばかりしてゐるから、本當の道理が分らない。眞理を眞理と見ることが出来、それに知識上の迷ひばかりでなく情熱上の迷ひもある。知つても行ふことが出来ない、行ひ難き事を行ふところに覺めた人の値打がある。さういふ境地に達することが佛教の行着くところだ。それをちやんと吾々の目の前にやつて見せてくれた人がある。三千年の昔

印度に生れた瞿曇悉多である。この人がいふ所の佛陀の妙境に修養しあげた。そこで佛陀と云へば此人の代名詞のやうになつてゐるが、佛陀といふのは必ずしも一人の人の名前ではなく、前に云ふ覺者の意味だ。此人をまた釋迦牟尼佛とも云ふ、釋迦といふのは、その生れた氏族の名で、牟尼は聖者の意味「釋迦氏の聖者」といふ位の意味だ、その上にモ一つ佛が附けば尙有難いわけた。

釋迦の佛敎と發達佛敎

話はそれだが、その釋迦が宇宙の眞理を體得した、そしてそれを實行し、人にも敎へた。かういふ點から云へば、佛敎は釋迦の敎へである。印度敎などは誰といふことなく自然と發達して來たが、佛敎は明かに釋迦といふ敎祖を持つてゐる。つまり、佛敎は釋迦の説く所を信じ、その業績に則つて、吾れ人共に佛陀となるの敎へである。尤も釋迦の説も、釋迦入滅後永い間にいろ／＼の變遷もあり、始めの佛敎とはその面影を異にするものも出來て來てゐる。もと／＼釋迦の

説法そのものも、所謂應病與藥で、その時折の機に臨み人に應じて説いたものであるから、各々その一端を取つて異説を立てるといふ風になり、今日では隨分派も多い。まづ大きく分けて大乘と小乗とする。小乗といふ方は原始的の佛敎で地理から云へば主に南方のセイロン、ビルマ方面に残り、大乘といふのは、發達した佛敎で、北方佛敎などともいひ、西域、支那、日本の佛敎の各宗派が之に當る。然し何れにしても、釋迦の生涯と人格とその敎へから流れ出たものであつて一派の系統が縷々としてその間を繋いでゐることは云ふまでもない。此本では無論各派の詳細などには立入つてゐられないから、開祖の釋迦が最初に説いた佛敎を主として觀る。

難行苦行の釋迦

釋迦の青年時代のことなどは、後からいろんな事を附け加へてゐるらしいのでしかとは分らんが、とにかく印度の一都市の君主の子で、よほど非凡な人物であ

だそれだけでは満足が出来ず、五人の弟子を伴つて山に入り、正統派の波羅門敎が説くところを自ら體驗して見ようとした、といふのは、靈魂は難行苦行に依り肉體の羈絆を脱し、超自然力を得、始めて救ひに入るといふことを波羅門僧は説いてゐたもので、オムといふ神秘の言葉を絶えず口ずさみつゝ、心は梵に專注し、凡ゆる欲を斷つて行くなれば、だん／＼その心は萬世を見、終ひに思考思索といふやうなものは全く止み、人格は消滅し、靈魂は有限の檻を脱して永遠の樂園に入るといふのである。釋迦は六年間といふもの其方法で靈魂の自由を得んと苦行した。その峻嚴酷烈な苦行振りに至つては、印度の世捨人等にも稀に見るものであつた。終ひには一日僅かに一粒の米を食ふに過ぎないといふところまで到つた。之を聞傳へた人々は盛に賞讃したが、俄然として彼は此苦行を斷念し、普通の人のやうに飲食を始めた。五人の弟子は之を變心背敎として憤ほり、彼を棄て、去つて了つた。

つたことは争はれない。その生れた時などにもいろんな議論があり、紀元前十九世紀とする人があるかと思ふと、三世紀だとする人もある。西洋の學者は紀元前第五世紀頃とするのが定説になつてゐるが、日本の學者などは、西紀前五百六十四年四月八日日出の時と時間まではつきりと云ふ。とにかく、基督より五百年も前に此世に生れてゐる。釋迦はその國の習慣に従つて弱年で結婚し、結婚後十年にして一男子をすら生んだが、その中心に絶えざる悩みは、權勢も榮華も家庭も義務も悉く棄て、靈に生きむとする熱望へと驅つた。由來東洋人特に印度人は、人生に對して悲觀的になる傾きがある。それに、印度には輪廻の信仰があつて、それが亦人の心に一段の壓世思想を生みつけた。一般傳紀に依ると、老病死苦を解脱せんがために出家したと書いてゐるが、佛者の所謂大放棄をし、美服を襤褸に代へ、一切を棄て、修業の途に上つたのが二十九の時とある。彼は直ちに當時の有名な波羅門僧の門を叩き、波羅門敎が教ふる全部を學び盡した。けれども、た

### 轉迷開悟の境

「難行苦行は結局徒勞だ」と、自白して家庭に再び歸り、自國に對する義務を果さうかとも釋迦は迷つた。さうした誘惑と戦ひ、煩悶が毎日が續いた。けれども或日の終日終夜瞑想の後、釋然として眞理の光が彼の心に湧いて來た。要するに不安も不幸も、そのもとを正せば欲望に因由してゐるといふことを發見し、人間そのものは欲望よりもつと大きなものである筈だと覺つた。人が欲望よりも偉大なものならば、欲望の奴隸になつてゐるのは意義の無いことではないか。かういふ思想の展開が、實に彼をして所謂展迷解悟の境に至らしめた。自分を愛する代りに人を愛し、一切の欲望を燼滅して行くならば、人生の眞理自らそこに開けるといふ極めて單純な救ひの道に想ひ到つたとき、波羅門の祭禮も祈禱も苦行も、悉く顔色を失つた。階級制度も一片の習慣に過ぎぬ、神の存在も必要がないといふ風に、彼の人生觀世界觀が全く茲に一變した。萬有は彼に對して新たなものとなつた。荒野は喜び、無人の地も讚美の歌に満ち充ちて來る。

### 單純な眞理

生命を得むと欲する者は之を失ひ、生命を失ふものは之を得べしといふ眞理、それは身を捨て、こそ浮ぶ瀬もあれといふ極めて單純な眞理だ。けれどもその單純な眞理は恐るべき實行難を伴つてゐる。釋迦にはその實行の用意が出來てゐた。彼の心は急に明るくなり、地上の鐵鎖を全く斷ち切つたやうな確信が生れた。かれは自ら佛陀なりと云ひつゝ、決然たる相貌を以て荒野から人里へと出て來た。その時に説いた第一の説教は、後に四大聖諦と呼ぶものだ。

### 滅欲と因果の則

苦痛や悲哀は、存在するといふことから來る。そこには欲望を伴ふ。その欲望を征服すれば苦痛も悲哀も滅却する。それが涅槃の境だ。涅槃に達する道が茲に明かになつたといふのが四大聖諦で、第一は彼をして家庭を棄てねばならなくせ

しめたものであり、存在はどんな存在でも必然的に苦痛を伴ふ。生も死も病も無病も、齊しく皆苦痛だ。だから、苦痛から逃れるには存在を否定するより外ない。どうしたら存在を滅却し得るか、死それは未だ滅却に至らない、自分は死んでもそれは亦直ちに他の形になつて再生して来る。因果の法則はどうすることも出来ん、だから永久に苦痛から逃れようとするには、死んでも足らぬ、その種を根本から碎き去らねばならんと説くのである。茲に云ふ因果の法則といふのは、これが釋迦の根本假定で、人はその功德や罪業の如何に準じて、死後再び何かしらんの形になつて再生するもので、或は牛となつて生れ、或は虫ケラとなつて生れ、木石となつて生れるといふ風に、原因は必ず結果を生み、決して人間は一代きりで亡びるものでないといふ思想である。さういふ思想が無かつたなら、釋迦はあすこまで苦しみます既に自分で死んでゐたかもしれない。死んでも逃るゝことの出来ぬ苦惱から、どうして抜け出て永遠の樂境に遊び得るかといふ眞劍な苦

悶も、此因果の法則の假定を知らずには察し得られない。

そこで、その苦痛の種を探ると、三つの慾が原因をなしてゐることを發見した。體慾、富、生命のこの三つだ。この三つを根本から抜き去らねばならん、一體、願望は無智から來るので、人間を肉體といふ牢獄の中に拘束する。それを滅却すれば、従つて苦痛から放たれるといふのは第二の聖諦である。

佛教の特色たる涅槃境

第三の聖諦は、療治の發見だ、こゝで吾々は佛教の特有語たる涅槃とか曷徳とかいふ言葉にお目にかゝる。涅槃といふのは、日本では寂滅など、譯される。後世になつてこの涅槃を哲學的に論議し、教義上の重要問題ともなり、佛教各派がそれ／＼の解釋を下すやうになつたが、教祖釋迦が最初に體驗したもので、彼は之についての議論はしなかつた。體驗者でなければ味得することの出来ない境地だが、要するに總ての煩惱の束縛を解脱して、因果の法則に支配される生死の境



からも超然となる境地である。一言で云へば慾念の消滅の状態で、慾念が消滅しないといふ例の因果の不可思議な法則に依て、更に新しい我を生み出す原因となる。因果の法は極めて嚴酷な鐵則で、今生の惡徳はその者を地獄に陥れ、幾千年間地獄の底に苦しませる。その末に植物や虫ケラとなつて再び此世に出て来る。波羅門で説く輪廻説は、釋迦になると因果應報の教義と變つてゐる。それに、佛敎では、人間に靈魂の存在を認めないから、或る存在の状態と他の状態との間をつなぐ鎖は、靈魂ではなくして行爲そのものだとする。言葉を變へれば、釋迦の主張は靈魂の輪廻ではなくして、行爲を中心とする形の變化であつた。そこで、人間が生を變へ代を重ねて變形して來ても、若しも彼の法則に従はむか、その人は所謂涅槃の境に到達し、その存在から脱離して茲に因果の苦界を脱することが出来る」と説くのである。

第四の聖諦は、佛敎の道德や立法の基本を成すもので、佛敎に對する正しい信

仰、僧侶となるための正しい決心、佛則の暗誦、僧侶たるの生活といふやうなことで、こゝに彼は僧侶としての生活の軌範を説いたものである。

釋迦の僧侶團と民衆訓

以上の四聖諦が釋迦の根本思想だが、佛敎をしてあのやうな成功を成さしめたものはそれだけでない。彼はその上に直ちに僧侶の團體組織を造つた。それはすでに波羅門敎にもあつたものであるが、實に勝れた組織になつてゐる。先づ彼は僧侶團體の各員に對して五戒を授けた。曰く禁せられた時間に食つてはならん、歌舞、音樂、世俗の歡樂に近寄つてはならん、身に裝飾を施してはならん、高き廣き臥床に就いてはいかん、金錢を受取てはならんといふのだが、この中で金錢を受取るなといふ戒律が最も大切なものとして嚴守されたものだが、何時の間にかお寺には財産が出來て來たのである。

釋迦は衆人に對しても五戒を授けた。無論僧侶も守らねばならぬものであるこ

と云ふまでもない。曰く、殺す勿れ、盗む勿れ、姦淫する勿れ、偽る勿れ、飲酒する勿れといふのだが、此中の初めの四戒は既に波羅門教にあつたので、最後だけが釋迦の附け加へたものだ。

#### 釋迦の感化力

佛教の成功は四聖諦でもなければ、その組織や教訓でもない、實に釋迦自身の大人格にある。彼の建設した佛教から彼の人格を取去つたなら、忽ち滅亡すべきものであつたと云つても過言でない。『彼の人格の力は如何に大きく之を見積つても見積り過ぎたといふことはない』とグラント博士なども云つてゐる。その面影の一端を偲ばせる一挿話を物語る。

バルナといふ豪商が、釋迦の教へを聞いてすつかり歸依して了つた。そして凡ゆる物を棄て、隣邦の蠻人の中に佛教を傳へようと決心した。けれども釋迦がなか／＼許さない。

#### 釋迦の佛

「おまへが行かうとするあのスロナバランダの人々は、暴戾殘忍で、つまらぬことにもおこり易く、猛惡極まる人達です、若しあれ等がおまへに無茶な事を云つて罵言讒謗を極めたなら、おまへはどうするつもりです。」

と釋迦が問ふ。バルナが答へる。

「彼等が口でどんな無禮を申しても、未だ手や石で私を打つんではありませんから溫和な人達だと思ひます。」

「若し打つたならば、どうおまへがする。」

「たとへ打たれても、棒や劍を以てしないのですから、私はおとなしい人達だと思ひます。」

「劍で打つたならばどうしますか。」

「殺し切りに殺されないだけに、おとなしい人達だと思ひませう。」

「若し生命を奪はれたらどうですか。」

「彼等<sup>かれら</sup>はたゞ一瞬間の苦痛<sup>くつう</sup>を私に味はしただけで、此不淨<sup>このよじやう</sup>な體から私を救つてくれるのですから、善良<sup>ぜんりやう</sup>な人達だと思ひます。」

釋迦<sup>しよか</sup>が此處迄聞いて、それだけの完全<sup>くわんぜん</sup>な忍辱<sup>にんじよく</sup>を以て行ふならば行きなさい、おまへは既に救はれてゐる、これから他人<sup>たにん</sup>を救はねばならぬ、おまへは既に彼岸<sup>びがん</sup>に達した、他人<sup>たにん</sup>を彼岸<sup>びがん</sup>に導かねばならぬ、おまへは既に慰安<sup>ゐあん</sup>を得た、他人<sup>たにん</sup>を慰藉<sup>ゐじやく</sup>せねばならぬ、既に完全<sup>くわんぜん</sup>な涅槃<sup>ねはん</sup>に達してゐる、他人<sup>たにん</sup>もそこへ導き入れなさいといふ。パルナはその使命<sup>しめい</sup>に赴き、非常<sup>ひじやう</sup>な成功<sup>せいこう</sup>をしたといふ話である。

かういふところまで、ひとりの力<sup>ちから</sup>が他人<sup>たにん</sup>を教化<sup>けわ化</sup>し得るといふことは、實に異常<sup>いじやう</sup>なこと、神<sup>かみ</sup>の靈<sup>たま</sup>の働きともいふべきであらう。マホメツトも孔子<sup>こうし</sup>も老子<sup>らうし</sup>も、これ<sup>これ</sup>皆神<sup>みなかみ</sup>の靈<sup>たま</sup>を持つてゐた。けれども釋迦<sup>しよか</sup>には遠く及ばない。

#### 釋迦<sup>しよか</sup>の傳導生活

釋迦<sup>しよか</sup>は最初自分の信仰<sup>しんかう</sup>を他人<sup>たにん</sup>に宣傳<sup>せんべん</sup>すべきや否やについて躊躇<sup>ちゆうじゆ</sup>した。寧ろ一切

を停止<sup>ていし</sup>してその心の平和<sup>へいわ</sup>を續けることが本當ではないかとも考へた。けれども結局<sup>けつじゆ</sup>かれは荒野<sup>くわうや</sup>を出で、先づ七年<sup>しちねん</sup>間<sup>かん</sup>自分を教へてくれた二人<sup>ふたり</sup>の波羅門僧<sup>はらもんそう</sup>を訪ねたが二人<sup>ふたり</sup>は最早<sup>もはや</sup>死んでゐた。そこで前に彼<sup>かれ</sup>を棄て去つた五人<sup>ごにん</sup>の弟子<sup>でし</sup>を尋ねた。彼等<sup>かれら</sup>は釋迦<sup>しよか</sup>の最初<sup>しよ</sup>の僧侶團員<sup>そうりよだんえい</sup>となつた。そこで忽ち六十人<sup>ちやくじゆ</sup>からの改宗者<sup>かいしゆしや</sup>が出来た、釋迦<sup>しよか</sup>は此六十人<sup>こゝろ</sup>の弟子<sup>でし</sup>を各方面<sup>かくはうめん</sup>に遣はしその教<sup>を</sup>へを説かしめた。これからの釋迦<sup>しよか</sup>の説教時代<sup>せつこうじだい</sup>が四十五年<sup>しよごごねん</sup>間<sup>かん</sup>續いた。天氣<sup>てんき</sup>の好い季節<sup>きせつ</sup>には、彼自らも四方<sup>せんぽう</sup>へ宣傳<sup>せんべん</sup>旅行<sup>りょぎん</sup>を續けた。雨天<sup>うてん</sup>勝ちな六月<sup>ろくがつ</sup>から十月<sup>じゆがつ</sup>へかけては、旅<sup>たび</sup>から歸つて弟子<sup>でし</sup>等を教へた。その間<sup>かん</sup>には随分<sup>ずいぶん</sup>いろ／＼の逸話<sup>えつわ</sup>もあるが、私等<sup>わしたち</sup>がいつも思ひ起すのは、その故郷<sup>こきやう</sup>を見舞うた話<sup>はなし</sup>だ、その國<sup>くに</sup>の王<sup>わう</sup>たるべき人が、手<sup>て</sup>には鐵鉢<sup>てつぱつ</sup>を持ち、家毎<sup>かみ</sup>に喜捨<sup>きしや</sup>を乞ひつゝ父王<sup>ちゆうわう</sup>の在<sup>あ</sup>り故郷<sup>こきやう</sup>の町<sup>まち</sup>へ足<sup>あし</sup>を運んだ。老いたる父王<sup>ちゆうわう</sup>が「どうか再び<sup>ふたたび</sup>王宮<sup>わうきゆう</sup>に戻つてくれ、さもなければ他所<sup>よそこ</sup>へ行つてくれ、自分で捨てた王家<sup>わうか</sup>に恥<sup>はぢ</sup>をかゝせないでくれ。」と彼<sup>かれ</sup>に哀願<sup>あいぐわん</sup>するやうに云つた。釋迦<sup>しよか</sup>は答へた。

「王様よ、あなたは嘗て王たりしあなたの祖先に對して、よくその義務をお盡しになります。けれども私は昔からの諸々の佛陀の子孫でございませう、佛陀はその食を乞ひ、邦人の施物によつて其日を送りました。」と。

#### 釋迦の往生

釋迦は自分で死期の近づいて來たのを自覺するや、親愛な從兄弟であり弟子であつた人に向ひ、「私ももう老いた、私の命も既に満ちて、私の人生の旅も將に終りを告げようとしてゐる。私は既に八十に達した。磨滅した車の回轉に餘計な注意が要るやうに、私の身體も之を保存して行くことが困難になつた。やがて私は逝く、だからおまへはおまへ自らの光りでありおまへ自らの避難所であれ、決して他の避難所を探さな、眞理をばおまへの燈として捉へて離すな、眞理はおまへの避難所だ。おまへ自身の外何人もおまへの避難所として仰ぐな。」と語つた。

いよいよ死に類するや、枕邊の衆僧に向ひ、「おまへ達に云ふ、諸々の物、初め

あるものは必ず消滅する、おまへ達も勵んで完全の域に達せねばならない。」と、之が釋迦の最後の言葉であつた。彼はその久しき以前より、既に無慾寂滅の境界に達し、こゝに歸するが如く生命の火を滅した。

佛教は斯くして一時非常な勢ひを以て印度人の間に流布された。彼の高き人格と獻身犠牲の精神とは、印度人の心を燃やした。由來印度人は何の宗教に依らず若しその説く人の生活が現世離れがしてゐて、専心靈界に奉仕する人だと見ると先を争うてそれに従ふ風がある。釋迦が彼等の間に恐ろしい魅力を持つてゐたのも不思議がない。釋迦が最初の目的は、托鉢僧の一團體を組織するにあつたのだが、だん／＼多數の人民も彼の教へに強く索かれて、平教徒としてその團體に附屬するやうになつて來た。彼は亦民衆には民衆の言葉を以て語り、問答、比喩、偶言をも豊かに用ひ、その教へを反覆説いた。或人は彼を以て印度の最初の説教者だとし、最も巧みな方法で雲上の知識を各人の門戸に取り來つたとさへ云うて

ある。

### 佛教の説教の記録

佛教といふ一大宗教が、釋迦の此一大人格から生れ出たものだといふことは、繰返して云ふまでもないが、釋迦の生涯とその性格とを研究することに依て、佛教の全體が分ると思つては大きな間違ひだ。最初釋迦が説いた原始佛教は、人間以上に位する神を信じないものだが、それがだん／＼變化して、いろ／＼矛盾撞着した教理や種々な偶像禮拜にもなつた。佛教の經典には二つの區別がある。南方佛教の所謂『三藏』と、北方佛教の『大藏經』とがそれだ。釋迦の説教が何時頃初めて文字に記載されたものかは分らない。とにかく、古いのが三藏だが、三藏とは三つの筐といふ意味で、始めは離れ／＼に三つの箱に收められて居つたものらしい。それが經典として始めて認められたのは、佛教發達史上の大恩人とされる阿育王の時、王の發意の下に、紀元前二百五十年頃に開催された佛教會議

で確定されたものだ。

### 三藏

この三藏は聖書から見ると紙數が倍もある。當時の釋迦出生地の地方語であつたらうといふバリ語で書かれてあつたものだと思はれる。阿育王の王女姉妹が托鉢僧としてセイロン島に渡り、この聖典を携へて島民を教化したとも傳へられる。佛教は斯くして後世印度から却けられても、セイロン島からビルマ、シヤム其他其邊の島々に傳はり、今日までその命脈を保持してゐる。

三藏は云ふまでもなく佛教の最も初代の文書である。阿育王が聖典の蒐集に従へと命じたといふ事から見ても、釋迦の説教が筆傳されてゐたことが分る。或は亦此三藏は、釋迦入滅後直ちに五百人の弟子が集つて開かれた會議で編纂されたのだとも云はれる。その會議の議長であつたケイシアバは、弟子中でも最年長であり隨一の學者であつたが、その自ら記憶する哲學的教義を論述したのが「論藏」

で、それから他の一人が、佛敎の立法や規則を詳しく覚えて述べてたのを筆記したのが『律藏』であり、最後に釋迦の從弟であり、二十五年間も親しく師事した阿難陀が、釋迦のいろいろの場合に説法した比喻や偶話を、記憶の儘繰返して筆記したのが『藏經』である。論藏、律藏、藏經此三つから三藏は成つてゐるが、無論當時のものが其儘今日に残つてゐるものとは思はれぬ。それにこの三藏は亦北方佛敎即ち大藏佛敎の方の大藏經にも無論含まれてゐるもので、その方になると亦ずつと違つて來てゐる。

大藏經

北方佛敎は今日世界の佛敎徒の大部分を包含するもので、その經典も非常に浩瀚なものである。初めは拙い梵語で書かれてあつたものだが、最初の西藏譯は第八世紀頃に出來たもので、その時も既に六百八十九書あつたといふ。大藏經は佛敎聖典全集とも云ふべきもので、前の三藏を主としそれに支那、日本でいろいろの

説を加へたものである。一切經といつても同じで、支那に於て譯された最初は三藏と云つてゐたものだが、後なつてに一切經とか或は大藏經とかと云ふやうになり、それが時代を経るに従つてだんだん殖えて來たのである。日本に大藏經が初めて傳へられたのは何時の頃だか明かでないが、奈良朝の時に五十餘卷の一切經が傳はつてから以後、鎌倉、足利の兩時代を経て諸種の大藏經が渡來したのである。

これ等の經典中には、基督教に極めてよく似た點があるといふことから、西洋の學者が不思議がつて怪しいいろいろな議論を立てゝゐる。或は佛敎は基督教より古いから、佛は基の父でなければならん、基督教もそれから新約の記者も、その前に佛敎思想に接觸したに違ひないなど、云ふ人もあり、亦イエスエツト派の牧師達なんかは、惡魔が救世主の降誕と生涯を豫め知つて、それを嘲笑せんがために釋迦といふ人物に依て之に先鞭つけたなど、も云ふ。また佛敎の經文はだん／＼

後世になつて附け足して行つたものだから、寧ろ反對に基督教の影響を受けてゐるとも論ぜられる。どちらでも世界の終局には關係のないやうなことをかれこれ云ふものだ。西洋にも閑人が居る。

#### 偶像崇拜化する佛教

佛教は一面から見ると、殆ど完全な有神説のやうであるが、その根本は無神説だ。佛陀は宇宙に遍満する光明であり智慧の代表である。智慧の最高のもの、つまり完全な人間は誰でも佛陀になれる。そこで佛教の禮拜の唯一の對象となるものが佛陀であり、最初の佛陀として崇拜される釋迦であり、更にその後佛陀として此世に生れて来た人々の像である。西藏や蒙古では、僧侶が相談して佛陀の靈魂が此人に傳はつたと云ひ、此人こそ完全な智慧の代表者だと看做さる、一人の人のを選んで其人を拜む。刺麻教とか西藏佛教といふのがそれで、彼等は一人の大刺麻僧は死ぬものでない、その人が死ぬと同時に更に他の形を取つて生れ来る。だ

から大刺麻僧が死ぬと他の刺麻僧共が相集つて、何處に大刺麻僧が復活せりと、それを探すことに苦心慘愴する。そこで、何處からかしらん恰度大刺麻僧が死んだ時と同時に生れた子供を拾ひあげて来て、非常に大事にしてお寺の中で養育し總ての肉慾と汚れたものから遠ざからしめる。自分こそは自ら神だと自重し、一般人の禮拜を受くべきものだと思ひ自信させるように育てるところが、大刺麻僧が死んだ時に西藏内に生れる子供が何百とあらう、その中から何れが本物だかを判定することは、どうせ出来ることでない。で、今では支那政府がラツサの市民に、之ならと認めてもらへる三人の子供を候補者に選ぶことになつてゐる。此大刺麻は何と云つても禮拜の對象となるものだけに、其権力も大したものだつたが、今では本物の大刺麻は何時でも子供で、いゝ加減物心が着く前に何者にか殺されたりして了ふ。そして亦後の赤ん坊が大刺麻を繼ぐといふ風で、實際は刺麻僧の中から選舉された刺麻長が攝政者として權力を恣にしてゐる。何か拜むものが無け

ればならんといふところから、佛陀の化身とも云ふべき、かういふ大刺麻のやうなものが出来上つたわけだ。釋迦をして彼の刺麻教を見せしめば、彼が退けた波羅門教よりも一層幼稚な偶像崇拜に驚くことだらう。刺麻教ばかりでなく、佛敎徒は皆禮拜の對象として何かしらを飾り、それを神に代へて拜んで來てゐる。中には獸類や植物などさへその對象とした。

佛敎と無神敎

釋迦が何故神の存在を認めなかつたかといふに、さういふ神などいふ抽象的な靈の存在が、彼にとつては考へられないことだつたからだ。その存在を證明することが難かしいからといふことからはない。嘗て波羅門僧が、人間は世界の起原をどう説明するかと釋迦に迫つたときの如きも、彼は議論を避けて、「余は唯世界の多くの害惡を他人と共に分けて之を醫療する人を探索するものゝみ」と廣言してゐる。彼の承認した唯一の造物主は行爲力であり、つまり因果の不思議で

あつた。どんな行爲も永久に滅却するものではない、因果といふ法則に従つて不斷に何處迄も開展して行くといふ神秘説がその根本だ。

西洋の或學者の如きは、佛敎は無神敎だと説き、神を認めないものを宗教といふことが出来ぬから、佛敎は全く宗教といふべきものでないとまで言つてゐるがそれは議論の爲の議論といふもので、事實宗教として立派に存在するから致し方ない。佛敎興隆の大恩人阿育王の如きも、正しく宗教的人物であつた。彼の石に刻んで銘文の一にも、『宗教の賜ものに比ぶべき賜ものは他になし。』とある。佛敎はその原始時代の純粹な形に於ても、後代の不純な迷信の状態になつても、矢張宗教であつた。しかも、佛陀自身は直ちに神として禮拜さるゝに至つてゐる。大乘敎などでは阿彌陀佛を禮拜する。阿彌陀の力に縋つて此世の苦惱から解脱しようといふ他力宗の神様である。其の侍者には觀音様がある。かういふ風に、後世の佛敎では釋迦以外にも更にその上の佛陀を抽象的に考へ出して、その御慈悲に



籠らうとする。佛教本來の精神とは離れてゐる。いろいろの佛即ち神様が造られて来て、終ひには随分荒唐無稽な空理想まで、その中に入つて来た。少くも釋迦當時の無神教から有神教に變つて來てる。その一方の悪い結果としては、荒唐無稽な不可思議説や、世界にも比類のない大虚禮が混つて來てゐる。祈禱の際に器具を用ひていろいろの形式をやるといふことは、全く後年の佛教の案出したもので、カアライルなどは之を廻轉する瓢箪組織とひやかし、無用の繰返し事とクサしてゐる。無用の繰返し事とは何ぞや、南無阿彌陀佛である。

#### 基督教側からの佛批評

釋迦には罪惡の意識が無かつたと批評する人もある。つまり、彼の望んでやまなかつたものは、罪惡から救はれるといふことではなく、不幸、苦痛の中より脱け出ようとするのであつた。彼は、その父に向つて、老病死の苦しみから救ふといふ保證を與へて下さるならば、その家庭に留まりませうと云つた。けれども

人間の最大不幸は老病死ではない、罪惡の重荷ではないかと彼等は云ふ。罪惡といふことを根本とする基督教の立場から見れば、かういふ批評も出て來る筈で、彼等は更に分析して、釋迦には祈禱と贖罪の思想が無かつた。人間が罪を犯せばその罪には必ず刑罰が附いて來る。例外なしに刑罰を受ける。許されるといふことがないといふ思想であつた。だから、道徳といふものについては、佛教の方が基督教よりも勝れてゐる。基督教では、罪が懺悔に依つて許される。佛教では許されない。一旦犯した罪は、原因結果といふ必然の鐵鎖につながつて行く。だから人間は悪い行に對して絶對的に怖れを懐くやうになるともいふが、さういふのも間違つてゐる。基督教では刑罰を怖れることよりも、罪惡を嫌惡することを第一に置く、罪惡を知らぬ宗教は、人類の傷を知らないものである。と、之が基督教側から觀た釋迦の批評だ。

#### 民衆教としての佛教

して、佛教の中心點がだん／＼動き、その理想の方向も變つて來てゐる。といふのは、釋迦自身の説いた佛教が到底民衆に行はれ得るのでなかつたといふ一面を語つてゐる。

#### 佛教は厭世教か

佛教が亦獨身生活を最上のものとし、托鉢生活を理想としたといふやうなことも、その人間觀が不完全と批評される種となる。スチアート・ミルは「佛教が勢力を有つてゐる國では、男の三分の一以上が獨身者となる、彼等は杖と鐵鉢を持って食を乞ひ歩く、價值ある文明の生れ出やう筈がない、厭世教の理想は生命のない世界を造ることだ」と云つてゐるが一面の批評だ。

### 五 猶太人と基督教

— 耶蘇基督の宗教 —

#### イスラエル民族の文明

佛教では亦寂滅の彼岸に達するといふことをいふが、それを分析して見ると、人間の救はれる唯一の道は、存在することでない、如何にして自殺をするかといふことになる。自殺と云つても、生命を斷つことではなく、凡ゆる種類の存在から滅却することだ。佛者が涅槃を追及するのは、自己の慾望を滅却して結局自分の存在を因果の永遠の羈絆の中から滅却せしめることにある。佛教の根本の目的はそこにあるのだが、それでは餘程卓絶した人のみの救ひの道であつて、一般民衆は救はれずに不幸の中に沈淪し去らねばならない。釋迦のまねを凡ての人にせよと云つても出來ることではない。

後世の大乗佛教は、その根本の缺點を補ふために、釋迦自身がその弟子に示した目的よりもつと低い目的を考へ出した。菩薩といふのがそれである。菩薩とは佛陀にならうとする修行者の意であり、釋迦の謂ゆる寂滅爲樂の境地まで完全に達した人のことではない。だから菩薩といふのは頗しく澤山ある。かういふ風に

ら彼等を守る神は天地唯一の主エホバであつた。荒野から彼等を導いてヨルダン川の西、死海の北から地中海に到る間の土地に移住せしめたのがモーゼだ、此時代は無論民族敵視時代で、殊に異民族間の争闘が絶えず、掠奪と侵入の時代であつた。イスラエル王國を明かに建設したのがダビテ王で、紀元前一千年とされるイスラエル王朝の黄金時代がそこに現出された。榮華の極みを爲したソロモンはその子だ。ソロモンは前後二十年を費して竣工したといふ大王宮を造り、民は課税苦役に苦しんだ。その後南北兩朝に分れたりして、いろ／＼に變遷したが、他民族の襲來の爲に遂にその神殿も毀され、首府も荒された。それが前五八六年でそれから後の彼等の國は一向振はない。すつと下つて紀元前六三年には、ボムベイが此微弱なる猶太國に最後の一撃を與へて以來、猶太は羅馬の一州として、羅馬代官の支配下に居る。此亡國猶太にヘロデが君臨してゐるとき、耶蘇基督が生れたのである。

基督教は耶蘇基督の創めたものだ。佛教に於ける釋迦、儒教に於ける孔子の關係だ。それなら、基督を研究するだけで基督教全體が分かるかといふに、さうばかり行かない事情がある。釋迦の以前に波羅門教が彼等の民族の間にあつたやうに否それとはもつと密接な關係で、基督以前の宗教思想が彼の祖先であるイスラエル人の間に、輝ける長き歴史を有つてゐる。イスラエル人の歴史を物語り、その宗教的信仰を傳へるものが舊約聖書だ。基督は此舊約聖書の上に自教の根柢を据えたのである。

羅馬の建設は紀元前七五三年で、オリンピアの創設は七七六年だが、羅馬が未だ建設されず希臘が漸く黎明の機運にあつたとき、東方のイスラエル人は既にその發達の頂點の達してゐた。イスラエルとは神の爲に争ふものといふ意味を持つてゐる。此民族の元來の郷土ははつきりしないが、右にメソポタミヤの文明と隣し、左に埃及の文明と境した、パレスチナ南東の荒野であつたらしい。その頃か

### 豫言者の群

この民族に最も特色のあるのは、昔から一神教的信仰と、所謂豫言者の簇出である。豫言者といふのは一種の宗教的指導者で、王政時代には一般人とは違つた特別な衣を著け、集團を成してゐた一種の僧侶のやうなものでもある。彼等はエホバの神の靈に囚はれ、その靈感に打たれては、時々宗教的狂態に陥り、直接神と相接し、未來を豫知して神の託宣を傳へ亦奇蹟を行ふ。彼等の最も力を入れたのは國民の政治に關すること、彼等の言は國政の方針をも左右した。

そのうちに、集團としてではなく、一個人として強い感化力を持つものが出るやうになり、續いて著作を書き残した豫言者の時代が始まつた。舊約聖書はそれ等の豫言者の著作物である。イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ダニエル等などがその中でも大著述を残してゐるので、大豫言者と云はれ、その外に十二人の小豫言者がある。また無名の偉大の豫言者もある。第二イザヤ、第三イザヤと呼ばれ

る人達がそれだ。

### 豫言者の言葉

彼等は何れも國民の危機に類した時に忽然として現はれ、神の默示を語り、國民に鋭い警告を與へ、彼等をして神の信仰と正義とに歸らしめむと努めた。彼等は自己の思想を語るものでない、神の靈に動かされ、神より授かりし神話を默し得ずして叫ぶのである。彼等の語る處は、一般人の聞き得ない特別の天啓である。而も明晰な散文的な思想ではなく、簡潔な警句、韻律ある詩の形式を採ることが多く、神秘的な幻想がその全部であつた。事實や名前などを明記しない、象徴的な暗示的なものであつた。その口からは、未來に關することも豫想せらるゝものがあつた。豫言者といふ名はその邊から生れたものだらうが誤解され易い。

豫言者の教へた宗教は、勿論イスラエル民族の範圍を脱してゐない、が、神の嚴密なる道德的世界の理想を信じ、正しき道を守るならば、神の國はイスラエル

に建設されると説く點で、一種の純粹な倫理的宗教にも違つてゐた。

救世主に關する思想

彼等は此世の終りに救世主が降誕して、イスラエル國の王となり、異教徒を倒して正しき審判を與へる日が來ると信じてゐた。ずつと前の豫言者等の書にさうした空想的な世界の終りといふやうな思想があつた。だんだん時代が進んで來ると、それが變つて一種の超人が天より來り、神に代つて審判をするといふ風に考へられてゐた。神の子の降誕の豫言がそれだ。耶穌基督は即ちその歴史的な豫言の中にメシヤとして生れたものとされる。耶穌自身にもその自覺があつた。然し、この頃になると國民的王者としてではなく、純粹に宗教的な教主として考へられてゐた。

一 神教の猶太教

猶太教といふのは此イスラエル人の間に、幾多の豫言者に依つて出來上つた國民

的宗教で、彼等の拜してゐた神は民族神ヤーベであつた。彼等は敵國に征服されてその捕虜となつてゐる間も此神の信仰を棄てず、機會さへあればその復活を圖つてゐた。國民全體を一の宗教團體と見、嚴格な儀式祭典を定めて祭司職を設け、祭司職は一般民衆とは別な階級に居た。彼は之を以てモーゼの立法なりとしてゐるが、豫言者の教へともまたかけ離れた一種の儀式的な一神教である。神を祭る規則が殆どその全部であつた。けれどもさういふ純然たる立法的な宗教が永く續く筈もなく、彼等がその立法に従つて儀式を守るのは、儀式その物を喜ぶのではなく、それに依つて神に仕へ、嘗てダビテ王の時代のやうな盛んな王國を建設したいといふ望みからだつた。外國の羈絆を脱して獨立することが、彼等民族の唯一の願望であつた。それがなかく實現されないで、例の世の終りといふやうな思想も生れ、救世主といふやうな觀念もそこから出たものだ。

猶太民族の排外思想

同時にまた、此宗教の眼目とする儀の行ひは、厳格な道徳的思想をも生み、またそれに背くことに依て神の罰を受けるといふ、神に對する怖れの思想ともなつた。神殿に於ける儀式祭禮の外に、聖書の朗讀と祈禱とは、彼等の心を平和にすることとして、個人的な信仰もそこから生れて來た。この個的な内面的傾向は、延いて此宗教を世界的なものとならしめ、彼等は異邦人に對する傳導をも爲すやうにさへなつた。けれども、猶太人は概して排外的で、異邦人の侵入壓迫に對しては極力抵抗したものだ。だから、紀元前二世紀の始めに、希臘の文化が入つて來たときの如き、之に妥協する態度を取るものと、頑として古き祖先の宗教と立法とを保守しやうとする派とに分れた。その保守派を代表する者がパリサイ人で、妥協の王家と結ぶものがサドカイ人であつた。王家黨であるにも拘らず、サドカイの方は勢力が無かつた。保守派は古來の教律と誠とを絶對に神聖な神の命令とし、之に背くものを異端とした。自然彼等の宗教は形式的な外觀的なものと

なつた。耶蘇が第一に排撃の舌鋒を向けたのが、彼等のさういふ形式態度に對してであつた。

耶蘇に依て猶太教は全く過去の世界に取殘されたが、その以前基督教の基礎の固まらぬ前に、既に猶太教はエレサレムの陥落（紀元後七〇年）に依て政治的に破れた。と同時に、形式的な立法研究から超越して、哲學的な神秘的な思想に移り、後年の猶太哲學を建設するやうになつた。近世になつて猶太哲學者が歐洲の思想界學術界に貢献してゐることは偉大なものである。

舊約聖書の話

この猶太教の聖典として、禮拜式の際などに讀み上げられ、また宗教的生活を規定する基本的な立法とされたのが舊約聖書である。舊約とは、基督の福音に關する所謂新約に對して云ふ名で、基督が新しく神様と契約をした、例の救ひの契約を記載した聖典が新約であり、イスラエル古代からの立法と幾多の豫言者等に

依てものされた神の黙示を記載したのが舊約である。

舊約である舊約聖書の内容は極めて複雑だ。天地創造の歴史や猶太の法制、イスラエル民族や猶太王國の舊き記録を盛る歴史の書類と、ダビテやエリヤのやうな人物の傳記を書いた物語書類と、エレミヤの哀歌とか、短詩集、「詩篇」のやうな叙情詩や、またヨブ記のやうな戯曲的文學を含む詩の書類、それから「ソロモンの祈」とか、「箴言」のやうな演説や説教の書類と、更に哲學的文學や豫言的文學の危然たる大全集である。

さういふものが殊に短詩などの中には、太古の素朴な感情をその儘歌ひ出したものもあり、また反對に比較的複雑な後世の懷疑思想を書いたものもある。従つてそれ等全體を一貫せる神學思想を編み出すことは不可能だが、イスラエル民族の宗教史を考へる最も重要な資料ではある。此書は彼等の生活の生ける記録であり、彼等の宗教的信仰と、道德的政治的生活に對する、鋭い反省批判の藝術であ

る。世界の古き文學書としても一讀の價値は充分だ。

基督とは「膏油がれしもの」の意で、始めは耶穌の弟子によつて、希伯來語のメシアの譯として、耶穌の稱號のやうに呼びなされたものだが、それから耶穌基督の全體が固有名詞として用ひられるやうになつた。(英佛では Christ 獨逸では Christus 希臘語では Khristos である。イエスといふ名は「神助く」といふ意味のあるヨシアといふ語から來たものだ。(英獨では、Jesus 佛では Jesus とつてゐる。)

### 猶太教の上に立てる耶穌

基督教は耶穌の教へに基き、彼を基督即ち救世主として信じたその弟子達の宗教的信仰生活から成立つた一大宗教である。その耶穌の宗教と弟子達の體驗とはその後聖典として認められた新約聖書の中に示されてゐる。耶穌は紀元前四年ナザレの人として生れた。主にガリラヤの湖畔に神の國の教へを説いた。その説教の主題は「待ち望める神の國は近けり、悔い改めて福音を信せよ」といふにあつた。聖書の記すところによれば、忽ちにして無数の信者が出來、彼等は心の平和

を得、病める者も彼の奇蹟の力に依て癒された。彼に従へるものは、彼を舊約聖書中に豫言されたる救世主の降臨とし、彼も亦自らさう信じた。

耶蘇は本来猶太教の中に生長したものだ、洗禮者ヨハネと呼ばれた豫言者の説教家に接したのを初めとし、超人的な嚴肅な生活の裡に、イスラエルに傳はつた舊約聖書に通曉すると同時に、神よりの直接の靈的啓示を受けた。凡ゆる人に罪の許しを與へ、罪人も異邦人も神の旨に依て皆救はるべしと説く彼の説教が、立法を形式的に重なる猶太教學者やパリサイ人等の猛烈な反対非難を受くるに至つた。彼は凡ゆる非難脅迫にも恐れず、却てパリサイの徒を完膚なきまでに痛撃した。反対派は彼を政治的叛逆を企てるものとし、陰謀を用ひて、彼がエレサラムに上つた時を窺ひ、突然捉へて十字架の上に虐殺した。

#### 基督教最初の團體

この最後の數日間の彼の言行は、新約の中に詳しく記述されてゐる。彼の死は

#### 基督教と人種

紀元三十年だ。此世に生を享ける僅かに三十三年であつた。弟子等は悲しみと絶望に閉されて四散した。再び彼こそ眞の救世主であるといふ信仰を恢復し、彼の肉體は一度は死せるも猶生きて我等のうちにあるといふ復活の信仰を有ち、新しき力に滿されて彼の教への宣傳に努めた。基督教會はその信仰に基いて建てられたものである。エレサレムに於ける最初の基督教團體は、猶太人の迫害に遭つて四方に散り、却つて廣く諸地方に新團體が出来た。最初は迫害者の最も猛烈な一人であつた。パウロの如きも、改心して却つて最も熱烈な傳導者の一人となるに至り、基督教は小亞細亞からマケドニア、希臘など、當時の文化的中心であつた町々に宣傳され、到る處に教會が組織された。

#### パウロから宗教改革まで

パウロは最早猶太人と所謂異邦人との差別を認めず、基督教は耶蘇を神の子として信する人々に救ひを與へる宗教だとした。従て彼の建てた教會は人種的差別



なき世界的宗教の特質を明かに示す團體であつた。それにパウロの思想には希臘哲學の影響もあり、その神學的思索も、最初の單純な信仰からすつと複雑な内容を持つものとなつた。爾來基督教は此方向に發展した。けれども無論いろんな迫害は彼等の上に常に加はり、過激な反對運動なども起つた。教會的組織を堅實にして、神聖なる使徒の名により、その制度なども一定して行く必要がそこに起つた。かくして生れたのがカトリック教會である。異教徒の迫害や政府の迫害に打克つて紀元三百十三年には、羅馬帝國の公認宗教となつた。爾來基督教は羅馬帝國の國教として中世まで變らなかつたが、羅馬が政治上東西に分裂すると共に、基督教會も亦東西に分れて相對峙した。東はビザンチン文化と結び付いた所謂希臘カトリック教會で、後にモスクワを中心として東歐地方に行はれた希臘正教會が之だ。日本で云へばニコライである。西の教會は羅甸文化と結び付いて新興のゲルマン民族の間に根を張り、中世紀には形式的な宗教に墮したかたちがある。羅馬法王

を戴く派が之だ。その教會の墮落を憤り、再び昔のやうな信仰を回復しようとする運動が起り、今の新教がそこから分離した。獨逸のルーテルがやつた宗教改革運動がそれだ。今日の新教にはまた幾多の派が分立してゐる。

#### 基督の中心思想

耶蘇の宗教の中心は、天國を地上に齎すことであつた。かういふ信仰は猶太教にも舊約聖書にも無いではなかつたが、耶蘇に依てそれが聖人類的にされた。神は純粹に人格的道德的精神的なものであり、人々はなつかしき父に頼るが如く天の父を信すべきものだとした。彼は神の國の觀念を説くことよりも、寧ろ如何にして罪深き人間がその美はしき神の國に入ることが出来るか、この地上の罪の子の集りを、どうして清き神の國に轉回し得るかといふ點にあつた。それは吾々が父なる神の意志を體得して、それを實行することにあつた。神の意志をその儘吾々に實行することであつた。かういふ點で、耶蘇には倫理が重要な問題とな

る。彼の倫理説は宗教的信仰に基き且つ報償の觀念と結び付いて、嚴格な絶對的なものであつた。而も猶太教のやうな、立法主義、形式主義に反抗し、汝の敵を愛せといふ愛の教へを道德的生活の根本原理とした。イスラエル民族のみが選ばれたる民と思ひ、異邦人を排撃する猶太民族の間に、かふいふ思想は實に天來の霹靂であつた。彼の道德的命令は無條件だ。時に極端と思はれることさへあつた。彼は總ての配慮を無用とし、財寶の價値を全然否定し絶對無抵抗主義を説いた。彼の人生觀は根本に於て神の支配と慈愛との下に、常に信頼に満てる平靜と歡喜とを保てといふにあり、彼自身が全くその體驗者であつた。彼は社會的倫理を説かなかつたが、彼の愛の教へは凡ての根本原則となる。

基 督 と 自 然

彼は天地萬物を愛した。父の書ける書物、父の描ける繪畫、父の組立て給へる音樂を愛する如く世界を愛した。耶蘇は主に田舎に生活して、都會には稀に出

るだけであつた。彼はその弟子等を、或は微風吹く丘の上に、百合の花を香る廣野に、鳥歌ふ湖畔に導いて教へを説いた。「野の花を見よ」「空の鳥を見よ」と目前の自然によつて神の愛を説いた。彼の世界觀は、凡ゆる物質界を聖化し去る實に前代未聞のものであつた。彼は自然を説いて直ちに人間、靈性の尊きを教へた。「狐には穴あり天空の鳥には巢あり、然れども人の子の首を枕する處なし」といふ彼自らの生涯に安じながら、ソロモンの榮華も野の花に及ばなかつたと教へた。

神 の 子 耶 蘇

耶蘇は自ら神の子と任じた。火と我とは一なりと云ひ、その父子の關係を亦廣く總ての人に實現され得べきものとした。彼は我等人類と同じ肉體を有つてゐた。飢ゑ、渴き、疲れ、眠つた。彼が十字架を負ふときの如き、彼の肉體は之を擔ふに耐への程疲勞してゐた。彼は惱み、憤り、悲しみ、悦んだ。けれども悲みは彼をして更に完全なるものとならしめた。彼はかういふ風に純然たる人性を具へて居つた

の罪の償ひであつた。

耶蘇の洞見と確信

耶蘇は將來を洞察して、世界の萬民が彼とその十字架の下に集まり來るべき事を豫想した。彼はまたその弟子に命じて、萬國の民を弟子とすべしというた。天地の總ての權は彼にあると信じてゐた。彼はまた此世の終りを洞見して、自分自らその最後の審判の席に最上位の審判者として立つべしと斷言した。かういふ觀念は耶蘇にのみ見るところで、世界古今にその類似すら見ない。釋迦もその弟子等に教へて、行きて我が教へを説けと言うてゐるが、釋迦の教へは、その根本が消極的のもので、此生を脱却し無限の苦しき輪廻を脱離するといふ點にあるから、生存を堪へ得ない重荷と思ふ人の心を惹くには足るが、壯健な精神の持王に對しては牽引力がない。勿論釋迦の生活は善美なもので、その傳導も成功したが、根本に於て厭世教であるといふ失敗がある。耶蘇の場合は、一面から見れば彼の

けれども、その純粹なる人性は絶對なる神聖と抱合融和してゐた。我等に父を現はし給へとピリボが叫んだとき、耶蘇は之を譴めて云ふ、「ピリボよ、我かく久しく汝と共にありしに、何ぞ父を我に現はせと云ふや、我を見しものは神を見しなり」と教へてゐる。神はその完全無缺なる耶蘇に顯現し、人々をして神に接近せしめるといふ大確心が自ら流れ出てゐる、プラトオも「完全なる人が若し此世に現はれむか、彼は嫌惡され迫害され、磔殺さるべし」と云うてゐる。神の化身として出現した耶蘇の生涯は、プラトオの豫言の一面を證してゐる。彼は如何なる迫害に遭つても、それはその人達の本性から出たものだとはしなかつた。人性の本來は善だと信じて疑はなかつた。彼はその最後の苦痛の時も神を祈つて、「父よ彼等を赦し給へ彼等はその爲すところを知らざればなり」と云つてゐる。彼は神の子なりとしての完全生活に依て神を此世に顯現したばかりでなく、人間の代表者として神の前に額づき、人の子の罪を懺悔してその赦しを乞うた。彼の死はそ

生涯は甚だ短く、その十字架上に殺されたといふやうなことも、失敗と見れば失敗である。どんな熱心な弟子でも動搖せざるを得ないほどの失敗である。にも拘らず、それに依て却つて彼の榮光が現はれ、彼自身亦その間に處して、靜かに彼の教への傳播を豫見してゐた。

耶穌は世の凡ゆる勢力が彼に反抗すべきことを知つてゐた。而も彼の要求は根本的で、彼の信徒も尙必然にその近親者と離反せねばならぬといふ性質を有つてゐた。彼自らも言ふ。「我の此世に来れるは平和を致さんが爲にあらす、刃を出さんが爲なり」と、けれども彼の用ゐた刃は、人の心靈を判断する刃であつた。その刃が齎らした騷亂戦争の切迫して來るに従つて、却つて彼の福音が全世界的に膨脹して行くと豫想してゐた。かういふ風に、未來に對する彼の態度は實に確信的のもので、かういふ確信は、モーゼにもソクラテスにも釋迦にも孔子にも見ることが出來ない。

我等は基督に於て、人間の力の偉大を驚嘆せずには居られない。今日の基督教會の説くところの教義は、その宗派に依ていろ／＼神學的な議論もあるが、我等は先づ總ての人の向つて此偉大なる人間の靈性の現はれを研究されたいと切言するのである。

## 六 マメホツト教

— 不思議なる回教の力 —

### 史上の不思議

世界の歴史に最も不思議な人物はマホメットだ。無學な一行商が創めた宗教が、今日猶世界の大宗教と遜色のないほどの信者を有つてゐることも不思議である。彼の創めた回教は、現存の大宗教中では一番新しく出來たもので、六世紀に始まる。その聖經コーランは、新約の三分の二位に過ぎぬが、著作當時の儘の形を保存して、後から何等手を加へてもゐない純粹なものだといふ點でも、他の

宗教には無いことだ。マホメツト自身は「自分の宗教は決して新しいものでない、  
 が、その祖先の宗教や豫言者や族長や基督の宗教を完全なものにして亞刺比亞人  
 に傳導し、ひいて世界に及ぼさん」と主張した。出来上つたものはカアライルの評  
 の如く、『亂雑なる基督教』であるに過ぎない。基督教が無かつたならば、回々教も  
 無かつたに違ひないと云はれるほど、基督教から生れ出た新宗教ではあるが、それ  
 にしても開祖のマホメツトは基督教の三位一體とは、父と子と處女マリアとの三  
 位だと考へてゐたほどの無學者で、彼の宗教にも従つて哲學的な思索とかいふや  
 うなものが更に無いにも拘らず、その信仰は忽ちにして一大勢力となり、先づア  
 ラビヤの亂雑極まる諸民族を合一して一大神政國家を建設し、かくて基督教をそ  
 の産地より放逐し、基督教國と知られてゐる總ての國々をも彼の宗教の前に跪か  
 しめた、實に驚くべき歴史上の事實である。何處からさういふ一大勢力が生れた  
 か、單にそれだけの事實を以てしても、世界を觀んとする人の一顧に値する。

マホメツトを産んだ土地と時代

マホメツトは紀元五百七十一年の頃メッカに生れた。少年時代は牧羊を業とし  
 憐れなる孤兒であつた。その後或る豪家の番頭となり、商用を帯びて小亞細亞の  
 方へ旅行をした。その家は寡婦が家長であつたが、遂に彼はその寡婦の夫となつ  
 た。彼の生活は極めて嚴肅清廉善良で、誰からも敬愛された。村の人は彼を呼ん  
 で「信用すべき人」と云つた。彼自身豫言者を以て任じ、その生涯を一變するに  
 至つたのは四十歳の時だ。

當時のアラビヤの宗教は多神偶像教で、殆ど體をなしてゐなかつた。マホメツ  
 トの目には全く見るに堪えざる迷信であり、バカバカしいと思つたが、と云うて  
 祖先の神々を捨て、どういふ宗教を信奉すべきか、彼は迷はざるを得なかつた。  
 たま／＼シリアに旅行して基督教徒に逢ひ、基督教の話聞いたが、彼は本を讀  
 むことすら出来ぬ無學であつたから、なか／＼分らなかつた。それに當時の基督

教國民は、初めの生きた精神は無くなり、矢張一種の迷信にさへ陥つてゐたものだ。いろんな宗派上の論辯から教會も四分五裂してその勢力も無かつた。虚文虚禮の信仰のみ獨り勢ひを得、その信者も全く腐敗して自らそこには亦新しい精神運動の機運も漲つて居り、また諸處方々には高德の隠者が居つて基督教の眞精神を傳へてゐた。

#### 荒野の宗教

マホメットはさういふ間にも猶太教と基督教との眞精神に接觸し、新しき眞理が彼の頭腦に目ざめて來た。それに、昔アブラハムやモーゼ等が彷徨した寂寥たる大荒野の旅行は、彼の心に天の父といふ神の觀念を植付けべき力があつた。荒野ほど人をして自らの小なるを感せしめるものはない。荒野ほど何かしら大なる神秘的思想を産ましめるものはない。ルナンの言葉に、『荒野は一神教的なり、その一望千里の壯嚴の様は、その儘無限者の觀念の象徴のやうだ。』とあるが、荒野

の旅行が彼に宗教思想を一層深からしめたことが思はれる。『神を畏敬するといふ感じが彼に起つた。』神よ汝の外に神なし、汝は生けるもの、自存するものにして微睡だもせず、天地間に存在する萬有は皆汝が所有なり。』とマホメットは叫ばざるを得なんだ。その神は豫言者の口を藉りて聖旨を傳へ、既に十二萬四千人といふ多數の豫言者が此世に有つたなどいふこともマホメットは聞き知つた。そのうちの五人なるアダム、ノア、アブラハム、モーゼ、イエスは、皆新しい默示を得た人達で、他の豫言者をして顔色無からしめたものだといふことも聞き知つた。その豫言者の最後の人がイエスだと彼は信じた。そのイエスの次に我は生れたと信するやうになつた。

#### 試練時代のマホメット

マホメットはそれから聖書の研究なども随分詳しくし、聖書の中にも偽文が混つてゐると云ひ、いろいろの點で彼の新宗教を築き上げた。けれども、さういふ

彼の議論や神學が、彼の新宗教の勢力となる何等の原因ではなかつた。當時既に猶太人はアラビアに住み、彼よりも遙かによくモーゼを知つてゐた。基督教徒は彼よりもよく聖書を讀破してゐた。或る民族は亦既にアラビヤ民族古代の信仰と基督教の教義とを打つて一丸として、靈的新宗教を建設してゐた。その間に立つてマホメツトが新宗教を創始し、忽ちにして基督教を地球上から追放せんばかりの勢ひになり、今日尙全世界の新教徒の總數と伯仲するほどの信者を有してゐるといふその成功の原因が何處にあるか。

徹頭徹尾マホメツト自身の人格に之を歸せねばならない。或時は世を避けて山間に彷徨し、獨棲の靜寂を恣にしつゝ、彼は冥想に耽つた。彼が數ヶ月を祈禱と斷食に送つたといふヒラ山の如き、磊々たる岩石、處々にある空洞、そして荒野の烈日の下に樹蔭もなく泉もなく小川もなく、荒涼たるものであつた。それに彼は小さい時から癩癩を持病に持ち、體格も非常に虛弱であつた。空洞の斷食の或る

日、マホメツトは天來の一聲を聞いたと傳へられる。曰く『叫べ』と。何を叫ぶべきかと彼が問へば、『造物者たる汝の主の名に依て叫べ、汝の主は仁惠深く、文字を教へ人の知らざりしものを教へたまへばなり。』と答へる。

彼は狂者のやうになつて妻の許に歸つた。自分でも全く狂者になつたのではないかと疑て見た。之が彼の得たる最初の默示と云はれる。その後メツカに十年メジナに十年、絶えず神を禱りその默示を仰いだ。最初の十年は彼にとつて試練の時であつた。全生涯を通じて、彼ほど極端な試練を受けた者は古今に類なしと云はれる。失望と嘲笑と侮辱と迫害と遠慮なく彼を苦しめた。最初に彼に歸依した者は、彼自身の家族、親戚、僕婢の數人であつた。この事が亦彼のいかに誠實であつたかを示す。一般民衆は彼を目して狂とし、彼の説くところは陳いと嗤つた。それに新宗教を受け容れると、メツカ市の經濟上の利害にも非常に影響した。メツカ市はアラビヤの大部分の宗教的首府で、四方からその寺に參る人達から受

ける利益を棒に振らねばならなかつた。だから、都市としても彼の新宗教を壓迫した。彼は宣教第五年に、その信徒十五人の小群を何人にも虐待せられざる地アビシニアに送つた。その信徒はだん／＼殖えて百名餘りが彼等と共に亡命した。アビシニアの王は之を保護した。マホメツトも遂にその地に移り、メツカ市の迫害と抗争した。彼の新宗教は、從來アラビヤに行はれた一切の組織を變へ、社會的政治的の一大組織を造らうとするものであり、その信條を略言すれば、「主の外に神なし、マホメツトはその使徒なり」といふ一事だ。

#### 神政國の主宰者とマホメツト

マホメツトがメジナに亡命したのは、紀元六二二年の六月十六日で、回教徒は此日を紀元の第一日として起算した。彼はその後十年間生存した。その十年間に立法者として、政治家として、大將として、裁判官として、帝王としての職を盡しまた説教者豫言者の務めを爲した。而も驚くべき成功を以て其新職務を成し遂

げた。經驗と才能の缺如を補ふべく、彼の個人的感化が更に偉大であつた。絶對的權力が彼の手に握られた。職權を以て命令する權力が彼にあつた、と同時に、前のやうな熱烈な豫言者風が失せ、その思想も多少變り、政略と戰爭の實際上の必要から、前には絶對的に主張した正義とか愛とかいふ教へも多少妥協譲歩せねばならなかつた。それに彼は九人の妻と二人の奴隸少女を持つて居つた。一寸その説明はつきかねる。

#### 親を握れるマホメツト

宗教には、暴力や壓制を用ひてはならんと人に教へて居ながら、彼の幕下に勇敢な武人團が出来上ると、彼は忽ち戰鬥の人ともなつた。猶太人が彼の宗教に反對するといふ理由で、その數百人を殺戮した。彼の新政略は驚くべき成功を以てアラビヤ全版圖を風靡した。その新信仰に反對する者も無かつたではないが、炎々と燃え上る猛火の如く、忽ち文明の國へまで蔓延して行つた。羅馬の大軍も西



かうしたことは實に驚くべき歴史だ。その經典たるコーランはどういふ本か、マホメツトが生きてる間は、書籍にする必要はなかつた。彼は天の默示に従つて自由にそれを書いて行つた。その説教を其儘弟子は記憶し、書籍が無くてもその全教訓を暗誦してゐたものである。少くも回教の宣教師は、その全部の暗誦者でなければならなかつた。彼の死後恰度基督教に見るやうに、口頭の言語は書かれたる言語よりも有効だといふところから、之を筆記して書籍にしたのが今のコーラン經だ。が、カアライルは云ふ、「回教は吾々に教ゆるに神に服従せよ、吾々の全力を擧げて、その命じ賜ふ事はどんな事でも行へといふことを以てする。大なる神の世界を小なる人の脳髓で觀察批評するといふやうな狂氣の沙汰をやめ、世界人事に起り来る凡ゆる事は、たとへ人間には計り知らぬ事でも、正しき法則に違ひない。その精神も亦善意なものに違ひない。人の義務は宇宙の法則に一致し、敬虔の心を以て黙つて之に従ふにある。その理由は問ふべきものでない。といふのが

班牙大王の率ゐる軍隊も、富と天國とを此世に來らせんと宣言するアラビヤ軍の鋒先の前には忽ち破れた。彼等はバレスチナ、シリア、波斯、埃及、北亞弗利加を征服し、一躍歐羅巴に進んで西班牙に彼の神政國を建設した。彼等は征服した民衆に、「回教を信せよ然らずむば劍か貢税か」と命じた。戰捷の極に達するや、戰捷者の心中には學問の精心が勃興して來、科學、哲學が獎勵された。この澎湃たる回教軍の歐羅巴侵入を喰ひ止めたのは、シャールマンが建設した神聖羅馬帝國だ。そのうち基督教の勇者も蜂起し、回教を西班牙から放逐したが、此時に韃靼蠻族の勢ひが物凄く、基督教徒も回教徒も皆之に威嚇された。けれども此蠻族も遂に回教に従つた。そして第五世紀の頃には、回教の教軍はコンスタンチノーブルを襲撃占領し、そこを根據地として諸方を侵略し、連戰連勝基督教國をして全く戰慄せしめた。

コーラン經と其中心思想

回教の精神だ。之はまた當然基督教の精神でもないか。基督も第一に神に献身すべしと命ずる。要するに、回教は混亂せる基督教だ。之がカアライルの批評だ。回教は單に神が唯一つだといふこと、それに従へといふことを教ふるのみで宇宙の眞理とか神の性質とかいふやうなことに就ては更に根柢を持つてゐない。少くとも何等神學上の新しい創意もなければ、要するにマホメットといふ異常な人物の熱情から廣められた、基督教の一種の畸形とも云ふべきものだ。今日文明の程度の極めて低い處にしか行はれない所以も其處にある。従てその教理などについては、こゝに言及することをやめにする。

比較 世界の宗教を觀る 終

大正十二年四月八日印

行刷



世界の宗教を觀る(人間叢書第六卷)

定價金四拾錢

著者	加藤 美 命
發行者	東京市神田區區新石町九番地 大 柴 四 郎
印刷者	東京市神田區三河町一丁目十六番地 川 上 隆
印刷所	東京市神田區三河町一丁目十六番地 凹版工業株式会社

發行所

東京市神田區區新石町  
電話神田三三三三番東京二四三

朝香屋書店

東洋哲學 老子から王陽明まで

四六判美本  
定價六拾錢  
送料四錢

(編一第書叢問人)  
著 加藤美侖

廿六版發行!! (口繪)中村不折先生筆「老孔二聖會見の圖」挿  
讀書界に大波瀾を捲起したる本書を見よ!  
疲れ果てた世界の神經が、今一齊に東洋に向けられてゐる。そこには取残された悠遠の哲學が、太古の森林の如く鬱蒼としてゐる。希くば新しき心眼を開いて、吾等が文化の故郷に遊べ、改造解放、民本革命、超然虛無、あらゆる思想が、二千年前の支那に燦爛として瞬いてゐる。  
此一巻、要領は萬巻を歴し、まづ漢學のオヤヂ共の度膽を奪へり、新人も讀め、舊人も讀め!

内 容 大 要

- 虛無主義の老子 平和主義の墨子
- 宿命主義の列子 性惡説の荀子
- 個人主義の楊子 龍辨の名家者流
- 超人主義の莊子 法治主義の諸子
- 哲人主義の孔子 陰陽二元の道教
- 民本主義の孟子 直成主義の王陽明

改造思想 ルソオから現代まで

四六判美本  
定價六拾錢  
送料四錢

(編二第書叢問人)  
著 加藤美侖

世界を焼く社會改造の焰の渦の全幅を眺めよ!  
社會主義も民本主義も、所謂過激思想も、止むに止まぬ人間必死の要求を背景とする社會改造の矢叫びである。その源を探れば遠く佛の革命兒ルソオに至るべく、十九世紀から現代へ、蓋世の偉才は悉く其勇ましき闘士であつた。  
滔々たる其精神は近代の中心思想として世界の心熱を燃やしつゝある。其全般を懇説した本書は、近代文明に通せんとする人の必讀の好讀本でなければならぬ。

内 容 大 要

- 天才兒レソオと革命思想▲佛蘭西革命と改造思想▲デモクラシーの實現▲アルジュンとプロレタリアの出現▲社會改造運動の先驅▲マルクスの學說▲社會主義の先驅▲のいろ／＼▲社會主義の近代文化と哲人の社會主義思潮と近代文藝及哲人の社會主義思潮と無政府主義▲無抵抗の革命兒ガンヂ

概哲學  
論學  
**常識としての哲學**

四六判美本  
定價六拾錢  
送料四錢

(編三第書叢間人)  
**著 倫 美 藤 加**

噛み砕かれた哲學大系！現代人の心の榮養！！  
芝居的一幕見をするやうな軽い氣分で、いと高き哲學の殿堂を覗きみられよ。古往今來數千年、人類の聖苦に依て築き上げられたる精神文明の絢爛に眩惑さるべし。哲學は學者の玩具でもなければ唐人の寢言でもない。現代人の常識として消化され、心の生活を豊潤にする活學問である。希くは無精を一擲して本書を讀め。何人も滿悦せんと斷言して憚らぬ。

觀 大 容 內

智慧の芽生、其成長▲仲の好い親類同志▲宗教と藝術と倫理學と哲學▲他人のそら似か▲哲學の内容は何だ▲認識論について▲形而上學で云ふ唯物論と唯心論▲宇宙の過去現在未來▲哲學上の人生觀▲哲學の背景をなすもの▲心理學と論理學と哲學

近現代  
哲學  
**カントから現代まで**

四六判美本  
定價六拾錢  
送料四錢

(編四第書叢間人)  
**著 倫 美 藤 加**

大哲學者の大思想を一巻の活畫として展開す！  
思想を談ずる者は一たびカントに還り、其流れに掉して、咲いては散る兩岸の想華を眺めつゝ、現代の大哲ベルグソン迄來ねばならぬ。連綿たる哲學思想の脈絡變遷を、一巻のフィルムとして讀者の眼前に投げ出したのが本書である。解説の首尾透徹せる點に於て、ズブの門外漢にも釋然通曉せしむる點に於て晦澁難解に肩を凝らせぬ點に於て嶄然として類書に冠絶する

觀 大 容 內

夢幻的な理想哲學▲厭世悲觀の哲學▲科學に化した哲學▲兩極端の痛烈な哲學▲個人主義の哲學▲オイケンの精神哲學▲シェームスの實用哲學▲新東方主義の思潮

近代文藝  
ゲエテから現代まで

四六判美本  
定價六拾錢  
送料四錢

塔に上りて世界を觀よ！然る後に日本を語れ！！  
此百年ばかりの世界の文壇を見よ。火事場のやうな猛勢さだ。吾等  
等は其燎原の火の全景を眺めむとして終にゲエテまで還つた。それ  
が此一巻である。由來、文藝は文化の反映、時代の先驅である。そ  
文藝を控除した世界は焼残りの骸骨である。血湧き肉躍る近代文明の  
核心に觸れむとする人は讀め。日本脚下の思潮は其影繪である。本書は之を  
白日の光に全照した。

〔編 五 第 書 叢 間 人〕  
加 藤 美 倫 著

内 容 大 観

▲ゲエテから出發して▲理想詩人がカモエーゴー▲ソラの自然主義を實現する▲詩人としての▲大なり▲トスエフスキーンを中心として▲十九世紀の英米文學の發展▲ロマン主義の興起▲南歐の現代文學の代表▲オランダの文學の代表▲オランダの英雄主義

比較宗教  
世界の宗教を觀る

四六版美本  
定價六拾錢  
送料四錢

史實と教義より觀たる東西の代表的諸宗教！  
世界的な大宗教だけでも六つある。その中にまた宗派が無數にあつて、お互に輕蔑し、敵視してゐる。儒教、道教、印度教、佛教、基督教、回教、それらの教義と歴史と獨立せる信仰を持つてゐる。それが、どう違ふかを比較紹介したのが此本である。一面に於て巧に描かれたる世界宗教史であり、開祖列傳であり、公平なる内容批評である。

〔編 六 第 書 叢 間 人〕  
加 藤 美 倫 著

内 容 大 観

人間の住む所宗教あり▲儒教と道教▲孔子學と老子學▲印度教▲吠陀學と波羅門教▲釋迦の佛教▲開祖物語と佛教の眼目▲猶太教と基督▲マホメット教▲不思議な回教の力

日本文化  
**吾等の佛教常識**

四六判美本  
定價六拾錢  
送料四錢

〔編七第書叢問人〕

**著 倫 美 藤 加**

**千四百年の日本の文化を裏書する佛教發達史**

木佛金佛石ほとけ、佛臭いこと世界無比の日本に住んでゐながら、一向その知識を持たぬは心細い。千四百年の昔日本へ來た佛教が、本家に衰へて日本に榮てゐる次第はどうか。傳教、弘法、法然、親鸞、日蓮、偉僧高僧を排出し、政治的にも、民衆的にも日本のあらゆる文化の基調は佛教にある。其複雑多面な全體を縦横に物語つた本書は正に江湖の感謝に値すべし。

目 次

- 佛様の御入來 ▲日本の神様と天竺の佛様 ▲王法と佛法との矛盾
- ▲傳教と弘法 ▲佛さん達の素性
- ▲法然の新宗教 ▲親鸞と一蓮 ▲日本の禪宗 ▲日蓮と法華經 ▲骨の抜けた佛様

加藤美倫著 ◆ゼンマルン叢書

(1) 四十二版

アイ  
ン  
ス  
タ  
イン  
分  
ら  
ぬ  
物  
と  
あ  
ら  
ぬ  
性  
が  
復  
た  
し  
ま  
し  
た

**相對性も是なら分る**

定價四十錢  
送料金四錢

どの本を見ても失望した人の爲に、分らぬと聞き怖して敬遠してゐる人の爲に驚む。世界を震盪したアインスタインの原を、小學程度の教養の人にも分るやう書き切つた著者の技術の巧みを見よ、第一頁から笑ひながら讀める國民讀本として發兌勿々大評判です。

目 次

- ▲一尺差が九寸になつた ▲學者の九指の入れ所 (科學の芽生からニュートン迄) ▲光學の争ひ ▲アインスタインの役目 ▲時計も物差も當にならぬ ▲こゝが相對性原理の要所 ▲今までの學説がぐらついた ▲相對性を一言で云へば (外數十項)

(2) 二十版

つ  
ま  
ら  
ぬ  
事  
で  
恥  
か  
ぬ  
事  
で  
汗  
か  
か  
ぬ  
事  
で

**吾身の上の恥と損**

定價四十錢  
送料金四錢

時には齟齬も一興だが、ザツクランで通る仲にも腹の底には用意がある、希くば本書を讀まれよ、本書一巻は文化の物差云はず語らずの不文律、現代相當の禮儀作法社交の骨の眞を穿つ他人を笑ふ前に先づ自己を省察されよ、紳士教養のメーデーは之

目 次

- ▲お客様の御入來 (客の迎接と社交禮儀) ▲人を訪れて\*口を見せ (訪問の心得と上手下手) ▲客をとるにも氣がひけて (今の人も必要な和洋食卓の禮法) ▲座敷はあゝが智慧がない (客問の裝飾心得) ▲首に鏡を贈るが如し (挨拶見舞贈答)

(3) 二十版

刑法 知識 **罪なき人も油断すな**  
(奇抜な附録)  
魔番附  
犯罪處罰一目瞭然

遠くて近いは男女の仲、善と悪とは紙一重といふ、過失が過失で逃らぬが今日の法、又此方が真直ても先方から曲つて来れば正當防衛の策も要る。法は悪人の爲めに存せず、善人の爲に存す知るは一時、知られば一生の損無精をせず御一讀、一生安心の寶とされよ。

内容の概観

▲有難くもあり迷惑でもある(刑法の御利益) ▲吾等の生命と生活の爲に(全人格の保護の法律) ▲金が敵の世の中(財産に関する罪) ▲お互に社會の一員として(公安を害する罪) ▲國を亂す罪 ▲お巡り(外數十項)

定價四十錢 送料金四錢

(4) 二十版

民法 知識 **權利と義務の鉢合せ**  
攻むるも守るも法の世の中  
日中に提  
灯必要

心得た者はメケムと法を滑り、知らぬが佛の懸耳に水を澆ぐ、法律など面倒臭いと無精をしてると風一匹の事にもハラ／＼し、人に聞かれても返事が出来ぬ。希くは本書を讀め。内容の懇切はいふだけ野暮用の凝らぬ文章にあらゆる紛争の種離題の掛引を一讀瞭然たらしむ。

内容の概観

▲貸た借たが事の始り ▲素人の驚くおどかし ▲裁判沙汰と物云ふ書類 ▲訴へられたの應戦 ▲最後の手段もお上の厄介 ▲差押から競賣まで ▲抵當と買入の話 ▲新しい借地借家法 ▲法律の保護に安心せよ ▲借地借家の争議調停

定價四十錢 送料金四錢

(5) 四十版

諷刺 評傳 **粹な親鸞様**  
民衆の宗教  
洗禮親鸞の魂が物をいふ

親鸞はナセ流行る。禪は茫漠とし、日蓮は骨が折れる。親鸞教は現代的だ。戀もせよ、金も儲ける、嘘も止むを得まいといふ。弱者の爲の哲學、俗物の爲の宗教だ。諷刺と洒落と妙文に其眞骨髄を穿ち波瀾萬丈の生涯。  
讀者の心頭會心の微笑を禁ぜらしむ。

内容の概観

(一)天笠坊サン顔色なし  
(二)高野聖に宿食する  
(三)南 瓜 の お 尻  
(四)儲める 秀 才  
(五)中 金 色  
(六)草の鞋に竹の杖  
(七)戀 の 關 所

定價金四十錢 送料金四錢

(6) 六十版

納税 知識 **知らずに納めてる税金**  
申告も不  
平も根柢  
ある知識  
の上には  
れよ

強制でない筈の税金が、嚴重煩瑣な法規によつて取立てられる。其裏を潜らうと悪算段をする者あり、分も分らず唯ブー／＼いふ者あり、税金といへば國家と國民と喧嘩腰なるは淺問し。大身上になると専門の博士を顧問として反問苦肉す、不平をいふ前に本書に依て遺般の機微に通曉されよ。

内容の概観

▲國稅徵收の實際 ▲地租の話 ▲所得稅の話 ▲營業稅の話 ▲相續稅の話 ▲通行稅の話 ▲礦業稅の話 ▲狩獵免許の話 ▲間接稅規則者處分の法 ▲酒造稅 ▲鹽油と砂糖と石油と織物 ▲賣藥稅とかるた稅 ▲印紙稅便覽 ▲登録稅便覽

定價四十錢 送料金四錢

主婦  
大學

# 細君アラだらけ

定價金四十錢  
送料金四錢

諷刺諧謔  
の生活の  
女中の男  
骨頂を穿  
つ珍書

著者曰く「人の細君をコキおろして此の一卷をなす。察覺のよき業でもないが、細君方からは恨まれても、天下の良人諸君子からは「よき代辯よ」と煽てられること必定」と著者一流の諷刺皮肉は天下の細君を滅茶滅茶となしたり。而も根もなき漫罵にあらず、悉く夫婦生活の眞に徹せるもの、女は讀んでくやしがり玉へ。男は讀んで「ソレ見ろ」と痛快がり給へ。

(7) 十 版

經濟  
知識

# 貧富ローマンス

定價金四十錢  
送料金四錢

活躍的  
な經濟史  
の活躍的  
な經濟史  
を語る人  
の皆富む  
の理想  
實現へ

貧乏は戀をも乾枯びさせる。いやなものだがナゼ貧乏人がある。金持は腹も減らぬに飯を食つてゐる。貧富の對抗は經濟史あつて以來、人類争闘の活畫面だ。現代を觀よ。プロとブルどががみくやつてゐる。これを古今に尋ね世界に究めて、貧富顛倒の經濟史觀を流麗に物話つたのが此本である。貧人も讀め、金持も讀め、そこには開かれざる寶庫の鍵がある。

(8) 十 版



515  
32

NO.

PATENTED NO. 119016

**"F-M"**  
**PAMPHLET BINDERS**

are carried in stock in the following sizes

Catalog No.	High	Wide	Thick
851(菊倍)	30. cm. x	22.5cm. x	1cm.
852(四六倍)	26. „ x	18.5 „ x	1 „
853(菊)	22.5 „ x	15. „ x	1 „
854(四六)	18.5 „ x	12.5 „ x	1 „
855(特)	24. „ x	15. „ x	1 „

Special sizes are made to order

LIBRARY SUPPLIES IN ALL KINDS  
**F. MAMIYA & CO.**  
OSAKA-TOKYO-FUKUOKA

終